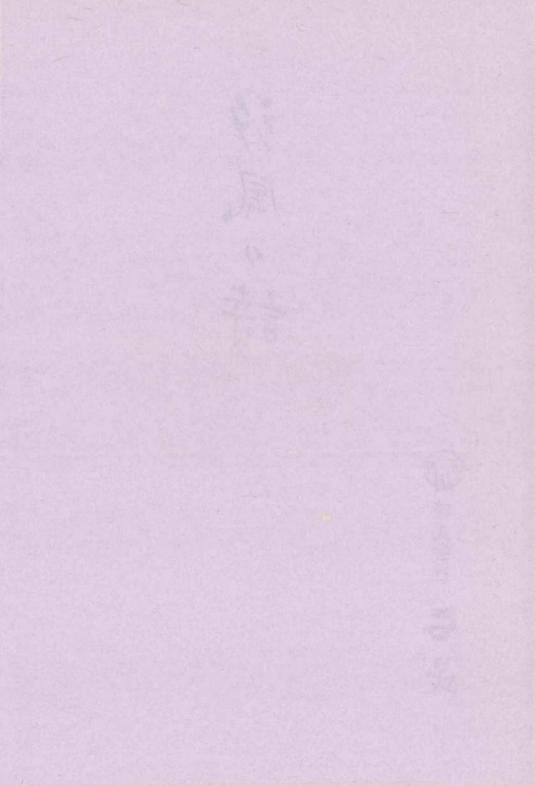
汐風の詩

が株式会社とよ





会長 石川 忍





社長 石川 光一





創始者 石川 忍



名駅南店オーブン 昭和61年12月2日



名駅南店 内部



名駅南店 内部



本社/平田町店



百貨店内 石昆ショーケース



百貨店内 石昆ショーケース























「やなぎばし」





「点心茶屋」



S61·8·28 石昆御一行伊豆箱根旅行記念

於,箱根十国峠

発刊のことば



112 和六十年五月、当社は創立満五十年を迎えました。これも偏に、お取引先各位をはじめ、 社

員、 人生一代といっても人それぞれに違った道を歩み、色々な喜び、悲しみ、苦しみなど、過ぎし その他多くの方々によって育てられ、導かれてきたおかげと、 心から感謝 しております。

日の思い出が相馬灯のように流れていきます。

争による徴兵と戦後の混乱の中での柳橋店、 丁稚奉公に入り、 昭和十年に独立してから、この道一筋に歩んだ五十年でしたが、 美和工場、 そして平田町本店の新設、等々の出来事 その間、 戦

がつい昨日のことのように思い出されます。

会いと協力がいかに大切であるかをしみじみと感じた次第でございます。 五十周年を記念して、記念誌を発刊することになりましたが、その時々の人々との出

進いたす所存でございますので、今後ともよろしくご指導、 これを機に、私どもは意を新たに創業時の精神に立ち返り、優れた商品づくりに、より一層精 ご鞭撻賜りますようお願い申し上げ

石川 忍



目次

あとがき	石昆・会社沿革 ―――	寸 感 ———————————————————————————————————	躍進への道 ――――	苦難時代 —————	戦後の出発 ――――	戦地での見聞記 ———	徴用令と召集 ————	青春時代 ————
148	144	137	117	90	85	70	63	55

三重県の『桑名』といえば、昔から、焼はまぐり、として有名なところである。

私はこの桑名の三ノ丸で、石川家の二男として生まれた。母は若くして父と結婚したので、 長良川の河口をすこし遡ったところにあって、三重県の北部、愛知県との県境にちかい。

れた明治四十四年三月十八日には母はまだ二十才であった。

売をしていたようで、生活にも困るということはなかったらしい。 そのころ私の父は衣料品、呉服、そういう類の物を扱う店につとめていた。当時はかなり手広く商

ど大騒ぎされるようなことはなかった。そのころの日本は生めよ殖やせよの時代だったのである。 子育ては大変だったと思う。尤も、その当時八人の子供がいるといっても、そう珍しいことではなか った。どちらかというと標準的な子持ちだろう。十数人の子供を持った夫婦も珍しくはなく、現在ほ 私がやっと三才の頃、独立していた父の商売がうまくいかなくなった。 私の兄妹はみんなで八人いる。しかし、そのころは妹たちはまだ生まれてはいなかった。八人もの

ほうではなかった。 父は商売人に向いているというタイプの人ではなかったようだ。つまり、商才に長けている

て、相手の動き、一拳一動を見逃してはならない。その一拳一動から、相手が何を考え、何をやろう ちょっと油断していると、 としているかを先に読む。そして、相手の機先を制して手を打っていく。 商売というのは、 月給取りとはちがって一つの売り買いが、その場、その場の真剣勝負なのである。 忽ち相手に切り込まれ、 深傷を負ってしまう。 これが商売なのである。 いつも、 神経をピンと張

父は実におっとりしていた。

家であったと言えるかも知れない。例えば、 人からは信用されていたし、いろいろ相談相手にもなってやった。そういったことから見れば、人望 うである。しかし人望家、必ずしも商売人に向くとはいえない。 つまり、他人を疑うということを知らない、実直一途な人物だったのである。そんな人だから、他 商売に行き詰まった友人に頼まれ、自分の名で、問屋から商品を仕入れ、その友人に回 結婚相手を見つけてきては幾組もの仲人をやっていたよ

その友人の店の立て直しはうまくいかなかった。やがて、父のところへ支払う商品の代金が少しづつ やっていた。 だが、一度坂道を転げ落ちはじめた車を止めることは、 最初のうちは、その友人も父に感謝し、商品の代金もキチン、キチンと支払っていた。 なかなか難しい。父の援助にもかかわらず、

遅れはじめ、とうとう、一銭も入らなくなった。

屋から仕入れた商品は父の名まえになっているので、代金は仕方なく父が立替え払いしなくては

普通の商売人だったら、 援助というものは、この辺りで打切るものである。 助けても、 相手が

立ち直る見込みがなければ、不人情なようだけれど、打切る。それが自己防衛なのである。

父はそれをしなかった。相変らず商品を仕入れ、友人へ回してやった。そして、その代金は父が立

替え払いをした。

父が連帯保証人として判を捺していた。友人は行方知れず……。 友人の店はとうとう倒産した。そして、借金だけがヤマのように残っていた。その借金も、 すべて

父は土地や家を売って借金の返済に当てたが、それは焼石に水のようなものだった。

こうして、私たち家族の苦難の流浪がはじまったのである。

私たちは、いままで住んでいた家を追われた。追われただけではない。これまで一緒だった家族は、

母と私、それに妹は、母の実家へ行くことになった。

同じ屋根の下には住めなくなったのである。つまり、一家離散である。

兄は、父の借金の質のような格好で小学校四年生のとき丁稚奉公へ出された。そこから小学校だけ

は卒業させてもらっている。

父は、母と別居し、 残っている借金の返済と、 店の再起をはかることになった。

私は母に手を引かれ、桑名の舟つき場から舟に乗って、櫓の音をききながら母の実家へ行った。

内いっぱいに植えこまれ、水車で米つき粉を挽いてウドンの製造販売をしていた。手伝いの女の人も 実家は桑名の揖斐川を五里ほど遡り、大垣に向った川沿いの太田という村である。大きな家であっ 部屋がいくつもあり、 広い廊下と、 池のある庭が記憶に残っている。桑の木とみかんの木が屋敷

ら過ごした。 いたように思う。その工場の離れを借り、私達親子は水車のゴットン、ゴットンという音を聴きなが

れは家での煮炊きの薪になり、そんなふうに家の台所を助けながら存分に遊びまわった。 ンマイ、ワラビなどを取りに行った。秋ともなればマツタケ、シメジなどが取れ、 懐しい思い出が沢山あり、忘れがたいところなのである。夏は友達と川へ釣りに。春は山ヘフキ、ゼ 私はそれから、この母の実家で大きくなり、 小学校へもあがったのである。私にとって、 枯枝も拾った。こ この家は

だが、ほんとうに思い出の山、思い出の川といったところである。 今も幼な友達は、その土地に残っている。現在住んでいる名古屋の家から西方へ一時間あまりの道程

なくおかしくなった。 れた家とはいっても、 これといった仕事もせず、子供をかかえ、ぶらぶらしながら食べさせてもらう。いくら自分の生ま 裕福な母の実家での生活は、なんの心配もなく過ぎていったが、母の弟へ嫁を迎えてから、 母も肩身がせまい。それも親や、血を分けた兄弟だけのうちは、 何とか住めた

が、嫁という他人が入って来るとそうはいかない。それに弟としても具合が悪い。

私達はとうとう母の実家を出ることになった。

13 丁度、父が四日市に手ごろな家を見付けたので、そこへ移り住むことになったのである。 の実家に居るときは、私は小学校へ通わせてもらっていたが、四日市へ移ってからはそうは

なかった。その時、私は小学校五年生を終えたばかりであった。そのころ妹も増えていたし、下には

n

乳呑児もいて母は子供から手がはなすことができない。

い。子供だから、 族の生活は、 という理由は、食うためにはとおらないのである。 苦しさをとおりこして、悲惨に近いものであったと思う。私も働かなければならな

少年期の追憶

私の少年時代というのは、非常に苦い思い出だけがつよく残っている。

先に記したように、私の家族は、

らなかった。母と私、 それに妹は、 はじめ母の実家へ、それから四日市へ移った。

父の商売の失敗から、一家がバラバラになって生活しなければな

生活は非常に苦しくなり、私は学校を止めざるを得なかったのである。止めるというより、行けなか ったというほうが正しいかもしれないが……。

を通 るのである。そして、行った店で仕事をさせてもらう。その仕事が終わると、そこで仕事をした時間 学校へ行けない私は、 い帳に記入してもらい、また次の店へ行くのである。そして、そこの店が終わると、 何のことはない。現在でいうアルバイトである。こうした毎日であるから、学校へ通える 腰に通い帳をぶら下げ、あちこちと自分に出来る仕事をいただくためにまわ また、

わけがないのである。

こうして私が働き、僅かでも収入を得て家計を助けないと、家族は乾上ってしまうのである。

湧いてはこなかった。 でかける。けっして弾んだ気持にはなれない。それかといって、父や母を恨むという気持はすこしも げ、楽しそうに遊んでいる。その様子を恨めし気に横目で睨みながら、トボトボと足を運んで働きに 六年生ごろといえば、遊びたいさかりである。同じ年頃の学友たちがワイワイ大声をあ

与えてやり、その喜ぶ顔が見たい。それで私は満足できる。そのため、私が学校へ行けず、友達と遊 父や母の苦労を少しでも助けてやりたい。そして、妹達に少しでも多く食べさせ、欲しがるものを 誰に不平不満を言おうとも思わなかったのである。

今でこそ、どうにか人様と同じ背丈であるが、そのころの私は背が伸びず小さかった。周囲の人か 確かに小さい。呼びかけてくれるほうは、それは蔑称ではなく、どちらかと言えば愛称にちかか よく「チビ、チビ」と呼ばれていた。私はこの「チビ」と言う言葉が実に嫌いでたまらなか

として持っていたのではあるまいか。それに人一倍つよかった負けず嫌い。そんなことが心理的に影 何が、私をそうさせていたのか。やっぱり、『小さい』ということに、つよい劣等感を、 だが、その言葉をきいた私は、 本能的に反撥を感じ、嫌な気分になったものである。

この「チビ」という言葉に対する反撥は、結果的に、私の「負けず嫌い」を大いに助長してくれた 本能的な反撥 嫌悪感をいだかせていたのではないかと思うのである。

それは私自身がいちばんよく知っている。そんなとき口をついて出た言葉が、小学校の読本で覚えた と思う。この強い「負けず嫌い」の精神が、ながい私の人生途上、どれだけの力を発揮してくれたか 「今に見ていろ僕だって見上げるほどの大木になってみせずにおくものか」であった。それを心の中

で呟きながら唇をかみしめたものである。

に行った先で大変な失敗をしてしまいました。 時、そうした物を口にしていた家庭は私達くらいではなかったか。そんな苦しい生活の中、 そのころの私達一家の生活といえば、例えば菜種の花のつぼみを近所のお百姓が捨てる前にもらって ゆがいて食べていた。今でこそ栄養があるとかで百貨店などの店頭に並べられてもい 私は

したが、そう簡単に許してはくれない。店の旦那からこっぴどく怒られた。当然、品物の代金は弁償 万古焼きの大きな荷物を運ぶ途中、 すぐにひき上げはしたけれど、 誤って用水路へ落としてしまったのである。 中の陶器は使いものにならない。泣く泣く店へ帰って訳を話 近くに居た人の手

その時 の惨めさ、 悔しさはいまもって忘れない。

小さな身体を這い蹲うようにして謝ったが、怒った旦

土間の上に、

頭を土に擦付けている私の眼に、知らず知らず涙が溢れでて、ポトポトと土を濡らした。反省の涙だ たの 悔 し涙であったの か。 おそらく悔し涙であったと思う。 一那はなかなか許してくれない。

やっと許され店を出たが、そのまま家へ戻る気にはなれない。 父や母に弁償金という大きな負担を

か い付かない金額にちがいない。家へ帰って、母や妹の顔を見るのがつらい。私の足はいつしか海辺へ けた。それでなくても苦しいときなのに……。おそらく弁償金は、 私が何日も何日も働いてさえ追

向かっていた。

た。目に映る伊勢湾は、 人気のない砂浜には小舟がひきあげられていた。私はその小舟のかげへ腰をおろし、 子供の私にはとても広く見えた。 春の海を眺 8

きらきらと陽光が海上を乱舞する。汐風が運ぶ海の香りが私の身体へしみ入るようだ。 いた私の頻を撫でて去る。緩くうち寄せる波が、渚を生きもののように走って行く。 遠くの水平線にポツンと黒い船影が見える。海上をすべるようにやって来る弱い南風が、涙のかわ 波が動くたびに

私は海が好きだ。こうして眺めていると心が落ちつく。

0) か。ずっと他所の店で働きつづけるのだろうか。それは嫌だ。二度と今日のような思いはしたくな 私は 子供心にも、 これからどうなるのだろうかと、不安であった。こうした生活がいつまでつづく

い。自分でやれる仕事をしたい。

よしつ!きっとやって見せる。 自分の仕事なら、 どんな苦労をしてもよい。どんな苦しみにも堪えることができる。

私は大きな口をひらき、 私にはこの海という友達があるのだ。この友達とならなんでもやれる。この香りを忘れずにおこう。 汐風を身体いっぱい吸い込んだ。

大正十二年九月一日の正午ごろ、私は床屋にいた。天井からぶら下っている長いコードの電球が激

しく左右に動きだした。あの関東大震災である、私はびっくりして半刈の坊主頭で外に飛びだした記

憶がある。当時の休日は月二回の一日と十五日であった。

を手伝ってくれないかという話が母親のところに来ていた。 大震災以後景気も少しづつ良くなりかけたころ名古屋で乾物屋をやっている叔父から私に店の仕事









奉公に出た頃

らということもあったが、なんといっても私の家の窮状が主な原因だった。 名古屋にある叔父の乾物屋へ丁稚奉公に行ったのは叔父が病弱であったし、 人手が欲しいか

のをよく憶えている。 した構えの店が、まだ若かった私にはとても大きく見えた。そして、得体の知れない威圧感を受けた 叔父の店は西区裏塩町の一画にあった。間口が五間はあったろうか。奥行きの深いどっしり

憶する。 叔父の店は純然たる昆布屋ではなかった。いろいろな乾物を扱っていた。使用人も二、四人いたと記 てからこちら、その香りに馴れ親しんで来た私にとって、それは無性に懐しいものだった。その頃、 初めてその店の土間に立ったとき、真っ先に私の鼻にとび込んで来たのは汐の香りだった。生まれ 広い土間には海産物が雑然と山積されていた。昆布とその加工品、 いろいろあった。 わかめ、あらめ、

私が同じ年頃の子供とくらべて一まわり小さかったからである。 叔父の店でも、 もっぱら「チビ、チビ」というあだ名の下に使われる。チビと呼ばれるのは、

ビン詰などを始め、

私はその叔父の店で商人としての修業を始めたのであるが最初はもっぱら外まわりの仕事、

1= 食いしばって荷車にとりつくが、子供の力ではなかなか車は思うように進んではくれない。 これでもかというように脳天に降り注いでくる。ぼーっとなる頭をふりふり「負けるものか」 である。 ある。 を含んだ乾物は意外と重い。荷車に積み、荷車からおろして運ぶのはチビの私にはかなりの重労働 外交と販売である。前日注文を受けた乾物を荷車一杯に積み込んでの得意先まわりである。そうして くる汗は目に染みるわ、馬フンの土ぼこりは舞い上って着ているものはホコリだらけになる。 あまり暑いので、ときに木陰で一休みして帰ると、誰が告げ口したのか「チビ、また油を売ってい のどは渇く。 寒い冬は手足は冷たかったが身体のほうは汗ばむほどで暖かくなる。 汗で着ているものは水に浸したようになる。容赦なく照りつける太陽の光は、 また翌日の注文を受けてくる。 さすが負けん気の強い私も情なくなり、 来る日も来る日も、そういった毎日の連続である。 よく母の顔を思い出したものである。 しかし、辛かったのは夏

ない道程なのであった。厳しいということと、店の旦那の人間性の善悪とは直接結びつかない。 簾分けをしてもらい自分の店を持つというのがお定まりのコースであった。 今度は逆の立場で丁稚を使うようになっても決して情け容赦はなかった。 時 の商人は皆小さい時から他人の店へ奉公に出て、十年、二十年の厳しい修業を経 商人を志すからにはどうしてもやらなければならない修業であり、 それは悪気があってのこと だから自分が店を持ち、 堪え抜かなけれ ばなら

たな」と店へ戻るそうそう怒鳴りつけられた。叔父は数人の使用人のなかで私にだけつらく当たるの

ではなかったが、口喧しく厳しい人だった。

だが、そういった事情が自分で納得できたのは、ずっと先のことであった。 心しければ厳しいほど、その丁稚の将来を真剣に考えてくれている優しい旦那と言えるのである。

先まわりという外交の仕事は私にはどうしても馴染めなかった。店先で品物を売るだけのほうが、よ 当時は、 ひたすら口喧しく厳しい叔父の態度につよい反撥を感じたものである。 だいたい、 お得意

ほど自分の性に合っていると思った。

ると、「小僧っ、なにをぐずぐずしている。はやくやらんかっ」と怒鳴りつける。自分の店の丁稚で や疲労などお構いなしに余分な仕事までやらせる。そして、私が気がむかないのでのろのろ動いてい れだけではない。「小僧、丁度よいところへ来た。ちょっとこれを手伝え」と、こちらの仕事のこ と かりではない。なかには随分威張ったのがいた。私のことを「小僧」「小僧」と呼び捨てにする。そ 意先の店でも腹を立てることが多かった。得意先といってもチビの私にいつも親切にしてくれる店ば まだ子供気の抜けていない丁稚小僧のくせに負けん気だけは誰よりもつよい私だった。だから、得

泣く泣く手伝うことになる。 私は猛烈に腹が立ったけれど、 お得意先を失敗じると、また叔父に叱られるので口答えもできず、

ると、 で帰りついて、 出 先でそんな不愉快なことがあり、塞ぎ込んだ気持で、疲れた身体をひきずり、 ムラムラと腹の底から激しい怒りが突きあげてくるのである。 (やれやれ)の思いで土間へ足を踏み入れた途端、 帳場から強雷一発ドカンと落とされ やっと自分の店ま

或る店でこんなこともあった。

「毎度、 ありがとうございます」

言い放った。 と私が必要以上に頭を低く下げているのに、その店の主人は挨拶を交わすどころか、居丈高になって り売っておってはダメだがや」 「こら、チビ。 お前、まだ一昨日きたばかりだぞ。そうそう注文があるものか。

疲れた足を引きずって余分に回ってきたのである。とうとう私の怒りは頂点に達し、爆発した。 私は、 油を売った憶えはない。叔父から「向こうへ行ったら、その店にも寄って来い」と言われ、

来ても頑として起きてやらなかった。ストである。叔父はときに猫なで声で、ときに怒って口汚く罵 その日、 私は夕食も摂らず布団の中へ頭からもぐり込んだ。それから三日間 叔父が来ても叔

ったが、どっかとチビツ腹を据えた私にさほどの効果はなかった。

きりでいろいろ世話をやいてくれる。叔母にはすまない気がしたが、 叔母はさすがに女らしく、 私の身体の工合でも悪いのではないかと本気で心配し、枕もとへ付きっ 私はおし黙ったまま三日三晩じ

かった。 に立って沖から打ち寄せる波の音を聞くように、私の心の中を、 そのころ私の心に、ある一つの目的が芽生えていた。それは、 私が少年期を過ごした四 高く低く掻きたてて消えることがな H 市

得意先まわりをするとき、いつも通る道がある。両側には乾物屋とか塩干屋とかの小売店がずらり

並 んでいる。

乾物屋というのは純然たる乾物ばかり。つまり、海苔、しいたけ、かんぴょう、はるさめ

缶詰などの類いを売っていた。

塩干屋というのは、 イワシとかサバ、カツオなど魚の干物、スルメ、出し煮干しなどを売る店であ

3.

よく気をつけていると、 その小売店の一軒で、ときどきおぼろ昆布を一箱づつ買ってくれる店があった。いつもではない。 どうも或るところから仕入れた品物に限られ ている。

このおぼろ昆布というのは、 昆布を薄く削ったもので、 いわば大工が鉋で柱などを削っているとき

出来るカンナ屑のようなものである。

でてくる。腕の秀れた削り職人をおいている店の品物はまちがいなく良い。そういった店の品物は このおぼろ昆布をつくるとき、その原料昆布の削り方によって、出来あがった品物の味香 りに差が

界でも名のとおった一流品ということで値も高

をつくっているところがある。そういう所の品物は一貫あたり四円十銭くらい。値は安くても、質は 貫四円くらいというのが相場だった。 こういった名のとおった一流品のおぼろ昆布で一貫あたり四円五十銭くらい、 ところが、 名はとおっていないが一流品に劣らないような物

標準のもので

四円五十銭くらいの物とくらべて何ら遜色はない。

ぼろ昆布一箱五貫目まとめ買いしてくれるのは、 実はこの一貫目四円十銭くらいの物が良くて安

4. 品だけなのである。

ばれるし、取引きもなが続きするにちがいない ……と。 私は、 それに気付いたとき思った。良い品物をつくり、安く売れば必ず買ってくれる。お客にも喜

同じ昆布でも加工の技術の良し悪しで出来上った品物の価格がちがうのに興味をもった。

私は、

そして、 かねがね (外交は嫌いだ)と思っていたこともあって、 (よし。昆布を削る技術を覚えてや

ろう)と心中密かに思いをめぐらせていたのである。

そして 私は三日三晩布団の中にもぐり込んで考えた末、黙って叔父の店をとびだした。・ かねて目をつけていた京都の『浜庄』という削り昆布をつくる店を訪ね、 昆布を削る技術

私の話を黙って聞いていた旦那が首をひねって、

を教えてもらいたいと頼み込んだ。

も取引きがある。そこの丁稚を引き抜いたと思われても困るさかい。この店へ来るのはかまへんが、 「ウーン、ちょっと待ってえな。 旦那に黙って出て来たっちゅうのは面白ろない。 あの店とはうち

チャンと話をしてからや」ということで、すぐには首をタテに振ってくれない。

徳に外れたことは出来ん、と頑として応じてくれなかった。 て来たのだ。私にはそれがよく分かっていたから、 私は困ったことになったぞ、と思った。叔父に話しても決して許してはくれまい。だから黙って出 い、ろいろ粘ってみたが『浜庄』の旦那は、 商人道

私は商人同志の義理人情というものが意外に固いのに驚いたし、 また教えられるところがあったの

私は己むなく旦那の言うことをきくよりほかなく、途方にくれた。

どこかへ行っちまって心配していたところだ。あんたの所へ行ってたのか。ほんとうに手数のかかる とにかく、名古屋の店の方へ連絡してからと、旦那はすぐに叔父のところへ報せた。ところが案の 叔父はカンカンに怒って、「あのチビ奴!すこし叱言を言ってやったら、糸の切れた凧みたいに

それを聞いた『浜庄』の旦那も

奴だ。すぐに戻るように言ってくれ」

とにかく、 一度店へ戻ってから」と、とび込んで来た厄介者を追払うように私は名古屋

わそうと、土間の入口のところで立っていた。が、いつまで待っていても叔父の雷は落ちて来ない。 ぬっと突っ立っている。(きっと大声で怒鳴りつけられる)私はそう思って少しでも恭順の意をあら (どうも変な工合だな?)-----そっと上眼使いで叔父のほうを見ると、いままで私が知っている一番 すごすごと名古屋へ戻り、チビの体を一層小さくし、神妙な顔付きで店へ入ると、叔父が上り框に

にい顔で睨みつけている。思わず、私は顔を伏せた。背筋を冷汗が流れるのが分かる。 どのくらいの時間、そうやって蛇と蛙の睨み合いがつづいたであろうか。「チビッ、奥へ来いっ!」

やっと叔父が声をだした。 おそるおそる顔をあげた私の目に、いま奥へ消えようとする叔父の後姿が映る。

私はそろりそろりと土間を抜け、 右手にある奥へ通ずる土間の格子戸を開けた。すると、そこに叔

母が心配そうな顔で立っていた。

「おまえさん、 何処へ行ったのかと心配しとりやーしたんよ。黙って家を出るものがあらすか……」

.

のに。叔父さんの口喧しいのは昔からの癖だわ。心の中は存外さっぱりしとるんよ。何を言われても、 「食べ物か何かで気に入らないことでもあったんと違うか? それならそうと言ってくれればよい

腹を立てずに我慢せなあかんでなも」

私は何を訊かれても、かたつむりのように固く口を噤んでいた。

「とにかく、どんな訳があろうと、黙って家を出たというのはよくないと思う、。叔父さんにお謝り

やーせ。わたしからも口添えするでね」

0) っ込んだ格好で腕組みしている。店で見せていた恐い顔色より、いくぶん和んでいる。あのときは店 使用人の手まえだったからか。それとも、すこし気持が落ち着いてきたのか。 叔父は居間で待っていた。座布団の上にキチンと正座し、両手首をそれぞれ反対の着物の袖口につ

私は、 叔母が開けてくれた襖のかげからおそるおそる姿をみせた。

「チビ、中へ入りやあ」

私は敷居の上をこするようにして居間へ入った。叔母もつづいて入ると後の襖を閉めた。

「もっと前へ来い。ばあさんは向うへ行っておれ」

叔父は、私と叔母に命令口調で言う。

もんで。黙って家を出たのは悪かったと謝っているもんで……」 ても……、 わたしからも言わせてもらいますよ。この子をあまり叱らんでちょうせ。まだ子供だ

叔母が傍から助け舟を出してくれた。

叔母はそう言ってくれたけれど、私は心の中で(俺は謝るもんか。黙って出るだけのわけがあった

んだから・・・・・)と叫んでいた。

れがなんだ。ちょっと叱言を食ったくらいで、ふて寝をする。あげくのはて、無断で行方をくらます。 か。それに現在は修業中の身や。どがいな苦労にも堪え抜かなければ一人前の商人にはなれせん。 「チビ、お前は人の恩ということを知っとるか。犬猫でさえ飼主の家は忘れん。お前は人間やない

犬畜生にも劣る恩知らずな奴じゃ!」

る。その叔母の言葉に、キチンと並べた膝の上に手をそろえ、神妙に頭を垂れ、 叔母が押し黙ったままの私と叔父を交互にうかがいながら、なんとか二人の間をとりもとうとして あんた、 そんなふうに言わないでも……。この子も悪かったと言ってるんやから……」 かしこまっている

私に向かって叙父は言った。

「チビッ。ほんとうに黙って出たことを悪いと思っているんか?」

「どうなんや。黙っていてはわからせん。ほんまに悪いと思っとるんか?」

では言えないかもしれないが、確かに恩がある。そう思うと、さっきの叔父の「------犬畜生にも劣る 学費を出していただき、自動車学校へも通わせてもらっている。先ほど叔父が言ったように大恩とま の手ほどきをしてもらっている。兄は兄で奉公先から暇をとり、そのころ花形の運転手になりたいと 族はずい分世話になっている。精神的にも経済的にも。私は小さいときから引取られ、こうして商売 のために三日三晩も布団にもぐり考えつづけたのか全く意味がなくなる。いつまでたっても私の希望 しかし、それではまた元のように毎日叔父の言うとおりに働かなければならない。そうなれば、なん そう思って口を開こうとしたが、ふっと脳裏に母や妹たちの顔が浮かんだ。この叔父には、私の家 叶えられない。よし、ここはチビの意地を見せて、自分の考えていることをはっきり言っておこう。 その時、 私は思った。いま叔母のとりなしで形だけでも謝れば叔父の怒りは収まるかもしれない。

れとも私が「恐れ入った」と思ったのか、一寸口調をゆるめた。 ……」と言った言葉が胸に突き刺さってくる。 とつおいつ心で迷っているうちに、一言も反撥しない私を見て、叔父は張り合い抜けしたのか、そ

かしたらきっと許さんでな」 そう言って座を立とうとした。 「チビ、よく分かったんやな。今度だけは許してやるよって。これから先、こういう不始末をしで

私はやっと決断し、顔をあげ、叔父の顔を真正面から見据えて言った。

「叔父さん、待って。一生のお願いがあるんです!」

立ち上ろうとした叔父は怪訝そうな表情で、また腰をおろした。

なんや。まだ、なにか言うことがあるんか?言いたいことがあったら、さっさ遠慮せずになん

「叔父さんのご恩はでも言うたらどうや」

か、京都へ行かせてちょう!」 おぼろ昆布を削る技術をどうしても覚えたいんです。私は日本一の昆布削りになりたいんです。どう 「叔父さんのご恩は決して忘れてない。きっとご恩返しはするで、私を京都へ行かせてちょう。

私は必死で叔父に頼んだ。しかし、かえってきたのは、

つもりは毛頭あれせん。ただ、いますぐといっても困ると言ってるんや。その時機が来たら行かせて 仇でかえすとは、このことや。お前がおぼろ昆布を削る日本一の職人になりたいちゅうのを邪魔する 「駄目や。チビ、お前は身体の弱いこの私に死ねと言うんか。この店を見捨てるというんか。恩を

も黙って出たんです。私はどうしてもあの技術を覚えたいんです」 「でも、いつかもそう言って止められた。それでは、いつまで経っても店を出れせん。だから今度

頑として後へ退かない私に、叔父と叔母はほとほと困り果てたというように二人で顔を見合せてい

た。

「とにかく、私の決心はかわりません。叔父さんや叔母さんのご恩はきっと忘れずにお返しするよ

私は京都へ行きます。二、三年で技術を覚えたら必ずこの店へ戻って来るで……」

かれたらしく、 チビ、チビと子供だと思っていた私に、これだけの根性があったのかと、さすがの叔父も度肝を抜 私の京都行を許したような、許さないような、あいまいの状態で私は京都の『浜庄』

の店へ入った。

ときに昭和二年六月であった。ずっと先の話になるが浜庄の旦那は、こう言った。

うとするなよ。 お前は技術を覚えたいという。それだけならかまわん。しかし、まちがってもその腕で生活しよ 商人として生きろ。商売は、ときに失敗もある。そのときは、いつでもこの店へ帰っ

と励ましてくれた。

て来い。番頭の席はいつでもあけておいてやるでな」

この旦那が言った言葉の意味は、のちに私にもよく分かったのである。

名前がつけられた。私にも丁稚名がつけられ、弟旦那の名前をもらって、よし吉、つまり「よしどん 娘が女中奉公に出ると「松どん」、「竹どん」と呼ばれたように、丁稚にも奉公人としての

であった。「よっさん」とも呼ばれた所以である。

この浜庄商店は兄の庄五郎旦那と弟の芳吉旦那の二人で仲よく経営され、庄五郎旦那は店の切りも 芳吉旦那はもっぱら外回りを受けもっておられた。

やっと念願叶った私は、希望に小さな胸を大きく脹らませながら、嬉々として『浜庄』の敷居をま

店をかわっても丁稚に変わりはない。相変わらず使い走りから、いろいろな雑用や、手伝いなど、

容赦なく使われる。

たいだのである。

という大きな目的があったから、どんな仕事を言い付けられても、一向に苦にならなかった。いつも しかし、私には(おぼろ昆布を削る技術を覚えるのだ。そしてこの道、日本一の職人になるのだ)

機嫌よく引受け、こまねずみのように、小さい体をフル回転した。

よく仕事をするので、先輩格にあたる店の丁稚や、職人たちからは、時に白い目で見られることがあ

よく働く――ということは、どんな場合でも、すべてよいこと、とは限らないらしい。私があまり

った。一種の嫉妬というものだろうか。

た。

こうして、 同僚や先輩たちの、意地悪い目も意に介することなく、私は、まめまめしく働きつづけ

そして、 旦那がいつ声をかけてくれるか。いつ、昆布を削る技術を教えてやろう、と言ってくれる

か。そればかりを楽しみに待っていた。

だが、旦那は、言葉巧に私をこき使いはするが、いつまで経っても、そのことに関しては、忘れて

私は、余裕をもっていた初めの気持から、だんだん焦々してくるようになった。

しまったように、なにも言ってくれない。

二、三年で昆布を削る技術を覚え、叔父の店に帰って恩返しをしなくてはならない。それを思うと、

じっとしてはおれない気持ちだ。

違いであることに気付いたのは、かなり経ってからであった。 私が、ひたすらコマねずみのように働き、旦那からの声がかかるのを待っていたことが、大きな間 この、私のいらだちを嘲笑するかのように、日めくりカレンダーは、日一日とうすくなっていった。 先輩の職人たちの話では、その技術を覚えるには、はやくても、三、四年かかるというのに――。

そのことに気付いたのである。 技術とは、教えられるものではない。自分で覚えるものだ――。

うである。旦那も人が悪い。そうならそうと、一言いってくれればよいのに。 そんなこととは露知らず、旦那の声がかかるのを待っていた。おめでたい奴だ、と言われれば、

いまさら悔んでもはじまらない。

それに、旦那を悪く思うのは筋のとおることではない。

職人を志したものが〈手に職をつける〉というのは、皆、そうして、自分で苦労しなが

その当時、

ら覚えこんでいたのである。

それからの私は、いままでの遅れを取り戻すかのように、毎夜々々、店の仕事が終わってから、 裏

の作業場で、カタカタ昆布を削ることをはじめたのである。

のことである。こうして苦心し、工夫しながら、長年かかって覚えこんだ、秀れた技術のコツという 体の使いこなし方を、見よう見まねで、真似てやるのである。〈からだでおぼえる〉とは、本当にこ ものは、 教えてくれる先輩が傍にいるわけではない。昼間、横目で睨んでいた職人たちの、手先の動きや、 は かの店員が寝静まった一時、二時まで、ただ只管、昆布を削ることのみに全精神を集中した。 まことに貴重なものである。

だから、おいそれと、簡単に他人へ教えてやれるものではないのである。

0 私は、 やっと職人たちがもっている、誇りというものと、異常なまでの、 自分の技術というものへ

温存への執念が、やっと分かりかけてきたのである。

は、とうとう店の奥さんから、 こうして、毎夜遅くまで、作業場の電灯をアカアカと点け、カタカタと昆布を削りつづけていた私 苦情と作業禁止を言い渡された。

電灯を点けるのは電気料が勿体ない。カタカタという音がうるさくて眠れない。これがその理由

夜中の昆布削りは諦めたが、私は、 道 一にのりはじめた夜の昆布削りも、まことに残念だが諦めざるを得なか 昆布削りそのものを諦めたわけではない。 った。

私は、東の空が白むのを待って起きだした。それから昆布削りをはじめ、職人たちが出てくるまでつ づけたのである。その間、 今度は、 朝早く起きて削ることにしたのである。電灯さえ点けなければ、奥さんも文句は言うまい。 一分一秒を惜しむように、削りに削った。時間の経つのがこれほどはやい

りをつづけていた これなら、今度こそ誰に迷惑をかけているわけではない。文句はでないだろう、と安心して昆布削

と思ったことはない。

ところが、やはりまた文句がでた。

嫌やがる。これは刃の調子が狂うからである。この庖丁の刃の調子をととのえることもコツのひとで、 分に一番あった状態にいつも研いでおく。これを他人が使うと、その調子をすっかり狂わせてしま 大体、職人たちは、自分が使う専用の庖丁を持っている。その専用の庖丁を他人が使うと、 今度は削り職人たちからである。昆布を削る庖丁の刃が傷み、調子が狂うというのである。

b 丁を使わせてくれ、刃の研ぎ方や、昆布の削り方も教えてくれるようになった。 を知った職人たちから、 そのうち、弛みない私の練習の成果が、すこしづつあらわれはじめた。昆布を削る速度もはやくな 私は、そうとは知らず、そこらにあるものを手当りしだい借用して練習していたものだから、それ 削ったおぼろ昆布も、 こっぴどく叱られた。が、なかに親切な職人がいて、それからは、 先輩たちの削ったものと、あまり見劣りしないようになってきた。 自分の庖

そのころ、腕のいい職人で一日、三貫目から四貫目は削っていた。標準的な職人で一日、二貫目か

ら二貫目五百匁というところだった。

れ」ということになり、その分だけは私の余分の仕事であった。 私も朝早く起きて削れば、五百匁から、一貫目は削れるようになった。そのうち「坊主、 お前 も削

その頃、昆布を削る職人というのは、庖丁一本持って歩けば、どこへ行っても生活できた。

などから付けられた。例えば、「ハコセイ」(注、顔の形が箱に似ているから)とかいうように――。 のいい職人だと大抵緯名がついていた。 顔の格好だとか、よくやらかす失敗だとか、動作のクセ・・

その名は同業者の間に知れ渡っていた。だから、京都へ流れて来て「大阪のハコセイ」だと

言えば、すぐに仕事させてくれた。

こういった職人は腕がいいだけに使いにくい。ちょっと気に入らないことがあると、プイととびだ とび出してどこへ行こうが、どこでも食えるからである。

収入も良いかわり、 標準的な月給が四十円から四十五円。腕のよい職人になると、 金使いもあらかった。飲む、打つ、買う、 三拍子そろったのが多か 七十円から八十円の収入

った。一度こうした生活へ足を踏み入れると、なかなか脱け出せない。

このことだったのである。 先に述べたように、 旦那から「技術は覚えても、その腕で生活しようとするな」と言われたのは、

職人たちは、花札を持ってきては私にも仲間に入れと奨めた。しかし、わずか当時の五十銭くらい

なかった。それよりも何よりも、自分はこれから暖簾を分けてもらい。商人として一本立ちしなけれ の小遣いでは五銭、 十銭負けても口措しくて眠れない。わずかな小遣いはなくなるし、勝った験しも

ばならない身ではないか。こんなことでは、躰も心も駄目になってしまう。 くら職人たちが奨めても仲間に入る事はなかった。それから今日まで競輪、競馬、競艇、パチンコ、 そう考えて、もう今後は金輪際、賭け事には手を染めまい。と心に固く決めた。 そのあとでは、い

れで別におつきあいで不便を感じたこともない。 おかげ様だと思う。

マージャンなど賭け事と名のつくものは見たこともないし、やり方も知らない。だからといって、そ

良くしてくれるようになった。私の少々の好き勝手は大目に見てくれるし、上級学校も出ているので 1, てきた。この『浜庄』には、ちょうど私と同じ年の息子が学校を出て店を手伝うことになり、 ろいろなことを教えてもらえて良い勉強になった。 私の、昆布職人としての腕が上達するにつれ、旦那や奥さんの、私を見る目が次第に好意的 何とか

のを見て、あるとき、旦那が、私を物陰へ呼んで、こう言った。 私が、あまりにも熱心に、というより半分狂人のようになって、 おぼろ昆布削りに打ち込んでいる

は きっと成功するにちがいない」 職人だ。どうして商売人として生きようとしないのか。 お前は、 なぜ、それほどに昆布削りに打ち込むのか。 いくらいい腕の職人になっても所詮、 お前ほどの熱心さがあれば、商売の方でも

私は、 旦那の心温まる好意には深く感謝したが、やはり、一旦心に決めた昆布削りの技術修得を、

心があかあかと燃えていたからである。 途中でやめようとは露ほども思わなかった。私の心中には、日本一の昆布職人になるんだ、 といっても、昆布だけを削って、一生を過ごそうなどとは という野

最初から思ってはいないのである。

ないのである。 波銀波の海面を渡って吹き寄せていた汐風と磯の香り……。それは忘れようとして忘れることはでき 私の心の底には、 伊勢の浜辺で、自分の店を持つのだ、 と誓った想いがいつもあった。 あの時、

私の、 おぼろ昆布削りの京都修業は、二、三年のつもりだったが、とうとう二十四才まで『浜庄』

で過ごすことになったのである。

私は「クジのがれ」で入隊を免れたのである。その時分には背丈も一六五センチくらいと、 『浜庄』の息子と、私は、ともに二十一才の徴兵検査を受けた。『浜庄』の跡取り息子は甲種合格。 マアマア

一人前に伸びていた。

しかも、 息子の方が兵隊へ行くというので『浜庄』の旦那は、ずいぶん気落ちしたようであ

この息子とは、私が京都へ来てから、ほんとうの兄弟のようにして大きくなってきた。そのうちの

と懇願された。 それで、私にこのまま店へ残ってくれと言う。息子が帰って来るまで、この店を助けてくれないか、

私は、昆布を削る技術もどうやら覚え込んだし、名古屋では叔父が待っている。早く帰って恩返し

を下げて頼み込まれると、 をしたいと思ったが、『浜庄』の旦那にも随分お世話になった。叔父同様恩がある。その日 それを振り切ってまですぐに帰るというのは、どうも気がすすまない。 部に、 頭

それに、 伝え聞いたところでは叔父の店もさし迫った問題はないようである。

まることになった。 ろいろ考えた末、『浜庄』の旦那の要望を入れて、跡取り息子にかわって、もうしばらく店に止ど 当時、その店には、職人が十人くらいと、丁稚小僧が七、八人いた。私はそこの

番頭であった。

ここで、その当時のこういった店の、厳しい階級制度についてすこし述べてみよう。

店には主人、つまり旦那が居て、その下に番頭(大番頭ともいう)がいる。そして手代

(中番頭と

もいう)がいて、丁稚小僧がいるという制度であった。

この階級を位置づける目安として、制服のようなものが定められていた。

下肽、 KK れ帽は許されない。黒足袋に鳥打ち帽子である。だから風釆がいくら堂々としていても、縞の着物に が着られるようになる。 織を着て、足には白足袋、頭には中折れ帽をかぶるのである。丁稚や手代には、この白足袋や中折 まず、下の方の階級からいくと、丁稚は縞の着物を着る。その上の手代になると、 それに鳥打ち帽ならば、それは丁稚。そのうえに縞の羽織を着ていたら、それは手代、 さらにあがって、番頭になると、着物は御召に角帯を締める。 それに縞の羽織 それ 無地

この番頭になるまでは、相当の年季と、商売上の才覚を必要とする。ただ、年数さえ積めば、皆な

となると、社会的にもかなり重要視される。 れるというものではない。相当に厳しい網目をくぐり抜けなければならないのである。だから、 番頭

行く人の目も、それなりに、尊敬と羨望をこめて眺められる。とくに、行き交う年ごろの娘など、 のみを最大の目的にして、 い番頭と見ると、互いに袖引きあい、ひそひそ語らいながら、熱い眼差しをおくってくるのである。 だから、丁稚の中には、 無地の羽織に白足袋、 それに中折れ帽をかぶって街を歩くと、一目ですぐに番頭とわかるので、 努力する者もいたのである。 この娘たちの熱い眼差しのまえで、 得意の絶頂感を満喫せんがため、それ

競争心理を煽りながら、安い小遣いを与え、番頭という階級を餌に、一所懸命働かせたのである。 えるようなものではなかった。 14 一時番頭だった私は、 この丁稚達を使う側、 小遣いとして三円五十銭くらい貰っていただろうか。決して、優遇などと言 つまり旦那の方も、 この辺の心理の機微はよく心得たもので、互いの

で運び上げるのは、 仕事といえば、十五貫目から二十貫目くらいの重い荷物を扱う。この重い荷物を裏の倉庫の二階ま かなり重労働だった。

のである。だからお腹もすく 職人の下仕事の面倒見も番頭の仕事であるし、こんな仕事が朝早くから夜遅くまでつづく

それで、 「おお、 よく つい食欲のすすむままに、 食ったなあー」 お櫃の底が見えるまで食べてしまう。すると、それを奥さんは、

と、嫌味たっぷりに言うのである。

郎と弟の芳吉という人が、別家の『浜庄』の旦那である。 石松という人で当主は二代目に当り、浜崎徳松という人だった。この本家から暖簾分けした小沢庄五 うのは別家で、本家というのは同じ京都にあって、 それにちょっとでも口答えしようものなら、立ち所にポカリと一発食らう。私の居た『浜庄』とい 『山浜』という暖簾であった。本家の先代は浜崎

毘羅さんに願かけした人だった。丁稚小僧から職人まで、五十人くらいの使用人がいたように憶えて この本家の『山浜』をはじめた、初代の旦那というのは、日本一の昆布屋になりたいと、 四国の金

なられた。もう一人、弟というのがいて、大阪へ修業に行っておられたが、この方も病弱で若死にさ その先代が亡くなられて、二代目があとを継がれたが、身体が弱く、四十三才か、四十四才で亡く

7

1,

あとに残されたお祖母さんや、お嫁さん、お孫さんは、昆布屋をやめて人に貸し、『山浜』 の暖簾

別家の系統で昆布屋をつづけているのは、おそらく、私だけではないだろうか。本来なら、その暖簾 を掲げてあげるべきだ、と、 やる」と言われていた。 私は、 『浜庄』に居るとき、この本家の旦那に目をかけられ、あるときから「うちの暖簾を分けて この旦那は、よく私の嫁を探がしてくれた懐しい人である。いま、この本家 いつも心にかかってはいるのだが……。若死にされた二代目の言葉が、

統 今から思えば遺言のような気がしてならない。後日、二代目『浜庄』の旦那にその話をしたとき、「系 の暖簾は貴君だけだから、、山浜、を名のれ」とも言われている。

私が京都の 『浜庄』から、名古屋の叔父の店へ戻って来たのは、昭和九年二十四才の時であった。

一、三年のつもりが、足かけ八年も浜庄にいたことになる。

めようと、家を改装して店を開こうとしていたからである。 昭和九年、あのジェーン台風のあった年に、三重県の四日市で、父と母を相手に、ぼつぼつ商売を始 のまま、四日市へ行って、自分で商売をやりたかったのである。と、いうのは、その前の年、 叔父の店には、四、五人の丁稚がいた。私は、 出来ることなら、 叔父の店へ戻らず、そ

だが、現実に叔父の店へ戻ってみると、なかなか出ることが出来ない。

もともと、叔父は身体が弱い。それに私の帰ることを、予想以上に期待していたこと。また、五人

ほど店員はいたが経営を見る人もなく、 店の経営内容も外から見るほど楽ではなかった。

なんといっても、叔父の反対を押し切って京都へ行った、その時の約束がある。

やっぱり、

私だって、犬畜生になり下がりたくなかった。

そういったことで、結局、それから一年間、 いろいろ腐心し、 努力したのである。 叔父の店で働いた。その間、 店の経営基盤がより固ま

そうして一年後。なお引止める叔父に

「また来て面倒を見るから……」と、やっと、 納得してもらって店を出た。

十円ほど金を貸してもらった。しかし父母の待っている四日市へは戻らず、その五十円の金を元手に 叔 父からもらう月給は四日市の父母に送金していたので、そのとき手許に一円もなく、 叔父から五

名古屋の中村区牧野町宮裏に、家賃七円の家を借り、昆布の加工工場をつくった。

昆布の加工をするところは少なく、

私の工場が初めてであった。

名古屋には、

こうして、私は初めて自分の店を持ち、独立して歩き始めたのである。

昭和十年五月二日が、その記念すべき開店の日にあたる。私が数え年二十五才の時であった。

記念すべき開店とならんで、私の人生にも、一つの大きな変化があった。

それは結婚である。

この伯父を仲人に頼んでの結婚式は五月三日に済ませたが、祝いは、開店の祝いとあわせ

てやることにしたのである。

出 席するという、 結婚と開店。その合同の祝宴には、 まことに簡素なものであった。 叔父夫婦と、 私の母と妹。それに花嫁の母。 全部で六、七人が

に一尾二十銭の鯛を付けてもらい、七十銭の折詰を特別注文し、 料理のほうも、 これまた折詰という簡単なもの。ただ、当時、 前途を祝ってもらったものである。 折詰一個五十銭だったものに、

当時 余裕の金などなかったし、これくらいにするのが、精いっぱいのところであった。 新婚旅行など行かれる筈がない。 もっとも、その時代、新婚旅行へ出かけるような人は、

ごく稀だったように思う。

こうして、私は、結婚と、自分の店の開店という、二つの大きな転機をひっさげ、新しい人生へ向

かって、希望の船出をしたのである。

舳先に立つ私は、 あの胸底に秘めた伊勢の海の波のきらめきと吹きくる心地よい汐風、そして心和

む汐の香りを、心ゆくまで味わっていた。

昔から「商売三年。地の利三年。 あること三年」と言われる。

ご多分に漏れず、私の店の経営も、なかなか軌道にのって来なかった。借金の返済はおろか、その

日その日の暮らしがやっとである。いくら一生懸命働いても、手にのこる儲けは知れたもの。こうし 自分で商売をはじめてみると、番頭時代とは、またちがった苦労がある。この時代ほど〈店の信

お客様に、いくら安くて良いものを売っても、〈信用〉築くためには、どうしても月日の流れが必

用〉というものの重みを感じたことはない。

要なのである。

三年は、あっという間に過ぎ去った。その間に子供も生れた。

私は、商売をやろうと決心した時以来、一貫して一つの信念を持って来た。

それは『良い物をつくれば必ず売れる』ということである。

この信念を固く守り実行した。 自分の技術を活かして、どこの店にも負けないおぼろ昆布をつくる。

私が独立したと同じころ、かっての番頭仲間達四、五人が、あちこちで店を開いて商売を始めてい

た。偶然、同時期になったのではあるが、やはり、彼等に負けてたまるものか、という競争意識は

来てくれたからである。だから、私は自分で売り歩く必要はなかった。ただ、工場で昆布を削ること にのみ、専念していればよかったのである。 布を削ることについて、私の腕のよいことをよく知っている彼等は、どんどん私の店の品物を買いに この仲間達の開店は、 結果的に、私にとって非常に幸いであった。と、いうのは、かねてから、

きには、折角仲間が買いに来てくれても、品切れになったときがある。すると、その仲間は やろう)と、思っていた。それが、いまはじめて実現し、実を結んだのである。 うして売り歩かなくても済むような、坐っていても人が買いに来てくれるような、 いくら私が働き者でも、一人で削る昆布の量というものは、およそ知れたものである。だから、 かって、叔父の店で丁稚小僧をしていたとき、得意先まわりが嫌やで嫌やで仕方がなく(よし、こ 「おまえのところのは、 品物がよいからどうしても欲しい」と、言う。 良い昆布を削って

「前金でもらうと使い込むから……」

と断るのもかまわず、半年分くらいの子約金を強引において

「どんどん削れよ。 おまえの削った昆布ならいくらでも売れるから……」

言いのこして帰るのである。

40

店をはじめて、まだ日が浅く、信用もなにもない私の店にとって、こうした、かっての仲間たちと

の取引きは、大変助かったのである。

あったと思う。品物が良いか、悪いかは、売れ行きによって何よりも証明される。 彼等が、こうして私の削った昆布を、ずっと買いつづけてくれたのは、何といっても品物の良さに 私の店から仕入れ

て帰った品物が、よく売れるから、彼等は、また買いに来てくれるのである。 開店当初、 品物の売れ行きがはかばかしくなかったのは、店の信用が付いていなかったこともある

地の利がよくないこと。つまり、裏どおりだったことにも一因がある。

こんなことがあった。

開店して、一年くらい経った頃であったろうか。かっての仲間の一人が、ひょっこり店を訪ねて来

そして 「ありやあ。 お前の店はここだったんか。店を出したとは聞いとったがよお――」

「こんな裏どおりでは、折角のおまえの腕が泣くぞ!。表どおりへ出るべきだな」

そう言って帰って行った。

はやく表どおりへ出たかった。その頃、年老いた父母と妹達を四日市から引き取り、私達は一緒に暮 私もそのことは考えていた。元手が十分なかったので、己むなく裏店で我慢してきたが、本当は

らすようにもなった。

と上昇をつづけていた。そうなると、なんとも店が手狭になったな、 どうやら、少しは店の信用も出来たようで、新しいお得意もぼつぼつ増え、商品の売れ行きもずっ と気になりだした。

段である。尤も、入居の時、三ヶ月分くらいの保証金と証拠金は要る。 して、早速下見にでかけた。広さも適当だし、何といっても良い場所だ。 丁度その時、友達の一人から、願ってもない良い話が持ち込まれた。それは、同じ牧野町の表どお 格好の店が空いているというのである。私は考えるまでもなく、すぐその話にとびついた。そ 家賃も十円とまあまあの値

商売をやるには、 目先の利きが大切。私は即刻借りる決断を下した。

そして、日を選び、店を表どおりへ移したのである。

丁稚小僧を一人おくことにしたのである。したがって、この出費も増えた。 店の規模が大きくなると、何かと出費も増える。それで、仕事の多忙を予想して昆布職人を一人と、

らなかった。むしろ裏どおりの店の時より減っている。 表どおりへ出ると確実に仕事は増え、売り上げも伸びてはきたが、収支のほうはそれほど良くはな

できて来たのである。 品質が良い〉そういった噂が、口伝えで、ようやく定着しはじめていたからである。つまり、 そこで、これではいけないと思い、新しい販路の開拓に意を注いだ。幸いしたのは〈石川の昆布は 信用が

だから、一度取引きをした店は、必ず得意先となってつづいたのである。 こうした努力の効があったのか、 仕事の方は猛烈に忙しくなってきた。それに比例して、店の利益

もうんと向上して来た。

集めに走りまわる必要もなくなった。 話 小遺いに不自由することもない。 まさに、商売は順風満帆、さらに帆をあげた状態であった。一時苦労した金の遺り繰りも、 何の心配もない。銀行の預金口座には、 勿論、 日常生活にも余裕ができ、欲しいものは何でも買えたし いつもかなりの余裕金がおいてあって、支払資金の掻き

その頃だと思うが、こんな事があった。

資金は十分あるはずだが……)そう訝しく思いながら応対に出た。ところが ある月末の三十日だったと思う。信用金庫の支店長が私の店へやってきた。 (何事だろう?

「石川さん、済まないが来月五日まで、すこし金を貸してもらえないだろうか?」

「なんや? 金を貸してくれってか……。金はあんたの方が貸すのではないのか?」

「いや……それが、実は……」

話を聞いてみると、支払いの金が不足しているというのである。

内々金を持っていそうな預金者を物色し、そうして私の所へやって来たというわけである。 考えてみれば、金庫といっても、あり余る金を持っているわけではあるまい。お客から預かった金 他へ貸し付けて、 先年のような取付騒ぎが起こる。だからといって、公に金を借りることもはばかられる。 金が無いとは言えない。無いと言えば金庫の信用に傷がつく。 利鞘を儲ける商売だから、 預かった金を一斉に返してくれ、 わるくすると、 ٤ 言われ

もあった。 私は、 堅いと言われる銀行から信用されたと思うと、万更悪い気はしない。店の信用も高くなった 内心得意なのである。早速、支店長の言うとおり、当座預金や小切手で手当てをしたこと

たしか、昭和十四年か十五年のころだったと思う。その当時、一般に支払いの日というのは、月末

締切りで翌月五日となっていた。

が相場であった。 かなり贅沢のほうであった。一般の職人や月給取りだと、せいぜい、三十五円から四十五円というの だった。腕のよい職人は別として、並の昆布職人だと六十円から七十円。当時の社会水準からすれば そのころ、銀行員の月給が五十五円くらい。師範を卒業した中学(旧制)の先生で、七十円くらい

近郷近在から、沢山の人がどっと集って来ていた。朝から、夜の十一時か十二時ごろまで、人足の途 絶えることがなく、 店がズラリと並び、品物を売るのである。私の店も勿論出していた。この日には、 町に(三八の市)というのが立っていた。毎月「三」と「八」の日に、 随分の賑わいであった。 この市を目あてに、 町筋へいろいろな

当時は専門店はあったが、百貨が一時にそろうと云うのは、こうした〈市〉が立ったときである。買 う方としては、欲しい物が一度にそろうので大変便利だ。

昭和十年五月、私は牧野町へ初めて昆布の加工工場をつくって店開きしました。これが、名古屋で この〈市〉での売上げは、一日で十円から十五円くらい。まあまあの商いであった。

0 昆布 加工場のはしりであったことは、先に述べたとおりである。

私 の工場では、 加工ということを、全くやっていなかった。 その後機械による昆布削りもはじめた。 静岡にはあったと記憶している。 当時は、愛知、 岐阜、三重では機械を使っ

て働 のは、 ろろ昆 浜庄で修業してきたので予備知識をもっていたため、それを基に、いろいろ扱いを工夫し、良質のと 私は そう立派なものではなく、町の鍛治屋で造らせたものである。私はこの機械については京都 布が削れるようになった。 この機械加工を思い立ち、 まもなく、 その機械を購入した。 その技術を完全に身につけ、 確か五十円くらいだった。 昼夜を分かたず身を粉に その機械 という

に拡大してい そうこうするうち、 この機械の扱いも、 調整がうまくできないと、 刃の立て方、 庖丁で削るのと同じで、微妙なコツがある。 昭和十二年七月七日、廬溝橋事件を契機として日支事変が起こり、 研ぎ方、 まるで削れない。やっぱり、そのコツを覚えるのは経験しかない。 昆布の締め工合、 削る角度など、 さまざまな要素が微妙に関係する。 口で言えといって言えるものでは 戦線は次第

布もこの対 戦争の拡大長期化にともない、 物資の円滑な運用と国民生活の安定を図るため、 象には 自由な価 格での流通はできなくなっ 物価統制令という法令が施行された。昆 たのである。

日本の国内事情も徐々に変化の兆しを見せはじめた。

愛知県の昆布業界もこれを機に「愛知県昆布卸協同組合」 という組織を、 昭和十五年一月に設立し

b

には 昆 昆 布を削る機械を据えることになった。さて、 布の共同加工をすることにした。そして中区木挽町堀川沿いに昆布の共同加工工場を作り、 いない。そこで私に工場長をやってくれ、ということになったのである。 機械は据えたけれども、それを使いこなす者が私以外

就任を承諾し、手伝うことにした。しかし、条件は出した。仕事があるときには、 私も自分の店の仕事があったけれど、 同業者が困っているのを見捨てるわけにもいかず、 その都度頼みに来

この工場長の頃、 報酬は月百円以上。そして、共同加工工場が稼動しはじめた。 昆布の採取地である北海道の根室や、 現在ソ連の占領地となっている国後島、

それに千島列島などの昆布事情を視察し、

その移入に当ったのである。

歯

太 れたのだ」と言う。 のかと不審に思って島の古老にたずねたら、 いワイヤーや鉄道線路用の 三十トンあまりの小さな船にゆられ、 レールが波打ちぎわに赤錆て積んであった。こんなところに鉄道を敷 伝手をもとめて初めて志発島に渡ったときであった。沢山 「ソ連の船が座礁して、 積んであったものが打ち上げら 0)

は絶えず危険にさらされているのだろうかと思う。 すでに、 その時分から辺りの海域は不気味な雲行きをみせていたのである。今さらながら、

カニ漁 船が引っきりなしに行き来していた。 住人・漁師はほとんどがアイヌ人だったようである。は(太洋漁業)の大きな缶詰工場があり

千島列島で採れる昆布の量は、 現在、 北海道で採れる量にほぼ匹敵していた。 それに質

もよかった。いわば昆布の宝庫であり、一日も早い日本への返還を願うものである。

になっていた。岐阜や三重でも、この機械は入れたものの、これを使いこなす職人がいない。そこで、 るようになった。その頃には、 やはりこの工場長をしていた頃と思うが、岐阜や三重でも、 この機械も需要が増えたため、 機械を使っての昆布加工がはじめられ 値段も、 一台百円から百五 南

機械が入るたびに私が出かけ、その使用方法の指導にあたったのである。

ろが、 合員の昆布の共同加工という仕事も順調に消化され、別に問題はないように思われていた。 何時のころからか、組合員の間に不平の声が出はじめていた。

「俺たちは戦時下で自由な商売もできず、五十円の金にさえフウフウいって困っているのに、

石川

は百円も貰って・・・・・」

は下火になるどころか、ますます勢いを増し、大きな勢力へと成長していった。 この声はどこからか、私の耳へもはいって来た。が、私は意にも介しなかった。 ところが、この声

利に聡いのは商人の常。私もだが、彼等もそうだ。

曲 て、 .をつけて、自分らの出費を抑制しようとしはじめたのであった。私の貴重な技術提供で、 私に辞を低くして頼み込んで来たあの初心は、時の流れとともに何処かへ忘れてしまい、 それ 相応の利便は受けているはずであるのに――。 何かと理

は ない。組合員が困っていると思えばこそだ。百円の報酬が高いか安いか。私は店の仕事をおいてで 不平の声が大きくなるのを横目で睨みながら、 私も考えた。この技術提供は好きでやっているので

のであれば、辞めるしかない。争ってまで、この仕事に執着するつもりはさらさらない。 目ではあっても、 5 彼等へ高度の技術を提供してやっているのだ。 決して法外なものであるとは思っていない。 この百円という報酬は、 どうしても彼等が納得できないという その見返りとして、 控え

そのうち表面化したこの問題は結局、決裂を迎えることになった。

私は技術提供拒否を宣言し、機械も自分のところへ持ち帰った。

海中の成昆布は十一月になると、オス、メスの種を排卵する。この種が海中を浮遊しているうちに ところで、昆布の繁殖については、一般にはよく知られていない。ここで簡単に述べてみたい。

成 は岩礁にのこる。 運より、 長するが、この昆布は薄くて食用にはならない。その年はそのまま葉は枯れてしまうが、 オスが メスに取り付き、 海底に沈んで岩礁に着床する。そして、 翌年三月から五月 にかけて 根元だけ

礁に残っていた根元から葉が出て伸びる。この葉が成育すると成昆布、 この親昆布は、 つまり、 採取する時季によって、それぞれ名称がつけられ オスとメスの種が邂逅し、 海底の岩礁に着床してから数えて三年目の四月ごろ、岩 つまり親昆布となるのである。

たものを ii じ北海道で採れる昆布でも、 から八月までの極く晴天のときに採れた昆布を『走り』という。 『中採』。それから十月中旬くらいまで採ったものを 採れる地方、採れる浜によって、 『後採』 微妙なちがいがある。また、 それ と呼ぶのである。 から九月中旬までに採れ 同じ

浜で採れたものでも、皆一様ではない。それぞれの品質に応じて、

一等から五等まで、五階級に級別

される。だから一つの浜で採れた昆布でも、時季、階級を考えれば、十五種類に分かれるわけで、 3

らに、これに採れる地方を加えれば、実に沢山の種類があることが分かろう。

したがって、本州へ移入されたこの昆布から、 その採れた浜を判別するのは、 なかなか難しい。

ほど幅広い商品知識と、多年の経験を積んでいないとできるものではない。

最上級のものは『真昆布』といって、これは北海道の函館から右よりの突崎の方へ行ったところで 商社や問屋では、入荷した昆布を、原料により、『出し用』と『加工用』に分ける。

採れる。

天日に干すと、 昆布は、海中にあるものはエンドウ豆を生で食べたように、非常に青臭い。これを陸上へひきあげ 不思議に、あのおいしい香りがでてくる。

香りである。プンとおいしい香りのするものが良い。そしてシケ臭くないこと。それに、砂がついて 昆布を選ぶとき、 上物を見分けるには、まず肉厚を見る。肉が厚くてつやがあるものが良い。次に

いない物などである。

このようなことに気を付けて吟味すれば、 まずまずいいだろう。

上級昆布は、八月に採れたものを一年間、 土蔵の中へ貯蔵してウマす。現在では、ビニール袋の中

入れて貯蔵するようになった。

など大変であるが、これは、どうしても手抜きできない作業である。 湿気に注意しながら、 うまみの出てくるのをじっと待つ。 この間、 商品の金利や、 倉敷

れたてのものは、かたくて、うまみなど全くないと言ってよいだろう。

昆 布の味を説明すると、 こうしておい T 翌年の梅 採れた場所や等級によって、味のちがいがあるのは勿論だが、 雨過ぎ、 つまり七月ごろから、 この昆 布を取出し加工にかかるのである。 枚の昆布で

その部位によって微妙な味のちがいがある。 真昆布』と呼ばれる極上品は、たいてい香りを嗅げば見分けがつく。

にも〈白口〉と〈黒口〉とあるが、いずれも見分け方は同じである。

のがこれである。 に、昆布特有のコクのある、底知れないうまみのある味。 この香りは、なんとなく甘味を連想させる。それから、 この味は、 砂糖でいえば、 上白糖といったところだろうか。 口に含んで嚙んでみると、嚙めば嚙むほど 般に 『高級菓子昆布』と呼ばれているも

昆 それに、 のうまみは 出 し汁が濁らないという特長があるので、 『真昆布』よりうすく、すこし塩味がある。煮出し昆布としては最高で、良い 高級料理店などでは必ず使ってい る。 味

|の利尻島、礼文島からオホーツク海沿岸で採れる昆布を『リシリ昆布』と呼んでいる。この

北

海

道

この らべうまみは劣るけれど、煮えやすいので、 蘭から釧路までの沿岸で採れる昆布を、 みついし昆 布』というのは 通称 出 "みついし昆布" と呼ぶ。この昆布は 一般家庭用として、昆布巻や、 高昆布』とも呼ばれ T いる。 煮物用に好んで使われる。 リシリ昆 布

その汁に濁りがでるのが惜しい。しかし、とても軟かくておいしいので、うどん、おでん、魚 道の東方、 ラウス付近で採れる"ラウス昆布"は"リシリ昆布"と似て味のよい出し汁ができ

肉すき、 関東煮などの出し用として最適である。砂糖でいえば、 黒砂糖の味のように独特の香

りと特有の味がある。

布を加工して"おぼろ昆布"や"とろろ昆布"をつくるのだが、この加工品の味は、 同じ原

加工する職人の腕によって、一味も一味もちがってくる。

柔かく、 りと溶けるようで、いつまでも、 の良い昆布職人が削った、極上品の『とろろ昆布』は、まるで綿を繰り出したように細く、短く 口に含むと、 うまみのある味と香りが、ふんわりと口中に漂う。舌の上にのった昆布はとろ・・・ コクのある味が揺う。

こと請合いである。 のよい大工が削ったカンナ屑のように長くつづいたもの。そうした物は、味も香りもとび抜けてよい ばろ昆布。の極上品は、幅が広く、薄くて、向うが透けて見えるかと思われるもの。それに、腕

と一人前として通用するようになる。 こういった極上品が削れるようになるには、厳しい修業と努力が要る。十年ちかくかかって、やっ

見せ所というもの。 ころをとったあとのもの。このサシミを、一枚の昆布からどれだけ取り出せるか、そこが職人の腕の そんなものがあるのかと疑問を持たれるだろうが、実はある。これは、昆布の黒皮の柔らかいと 期を入れて、腕を磨いた昆布職人がつくる昆布の"サシミ"は実にうまい。 昆布 のサシミという

うまいところは上皮と芯の間にある部分で、腕のいい職人になると、 実に器用に取り分ける。

残った芯の部分は パッテラにする。この芯も、 うまい昆布からとったものだと捨てがたい味

鯖ずしなどに使われる。

丁稚のなかには、栄養失調ではないかと思うが、工合を悪くした者もいた。 たわけでもない。今から思えば、あれでよく栄養失調にならなかったものである。 をかけたもの。 小さかった私には、とくに辛かった。食べさせてもらう朝の食事と言えば、パラパラの南京米にお粥 その当時は、 朝は六時まえに起きだして、夜は十時ごろまで。一日中、十五貫目から二十貫目の物を運ぶ重労働 それに梅干しと味噌汁。大根の尻尾のような漬物。それはそれは酷いものであった。 どの店もそれが当りまえだったので、別に不思議とも思わず、とくに不満をもってい 丁稚時代の苦労は、いま思いだしてさえよく辛抱したものだと、我ながら感心する。 私もそうだったが、

よっぴり。そのうえ、 っかり休もうものなら、 った覚えはない」と、 ほど粗食で、 表面では、毎月一日と十五日は休日となっていたものの、これは名ばかり。 日中重労働をつづける毎日であったが、与えられる小遣いといえば、 「仕事もロクにしないくせに、休みだけは抜かりなく取ろうとする。休めと 怒鳴りつけられ ほ

強も怠たるわけにはいかない。 え込まなければならなかった。それだけではない。帳面付けもするし、算盤や習字の練習もやる。 このように苦労して習い覚えた知識や、 自由時間などまったくないような日常のなかで、 ほんとうに、 自分の努力で会得した技術というものは、 寝る時間を惜しみ、身を削っての修業であった。 昆布を削る技術を、 自分の才覚で覚 そう容易に忘れ

られるものではない。頭の細胞の一つひとつに、腕の筋肉の一筋一筋に、しっかりと、埋め込んであ るのと同じようなものである。つまり、名実ともに身についたものなのである。

番頭になり、 暖簾分けをしてもらうためには、それはどうしても我慢し、 堪え抜かなければ

ならないことだった。

に、その要領をおぼえる。 一人もいないだろう。三日もすると皆逃げ出してしまう。やはり、心がまえのちがいと言うべきか。 現在の時代だったら、いくら立派な技術を覚えるためでも、こんな修業に堪えうる者は、おそらく そんな苦労の連続ではあったが、同じ仕事をするにも要領というものがある。仕事をしているうち

H 皆、すこし早目に起きて、 那が起きてくると 日と十五日は休日となっているのだが、必ず何か旦那から仕事を言いつかる。そういう時 旦那が起き出すころまでに、パッパッと仕事を片付けてしまう。そして、

「旦那さま、 お、 もう終えたのか。それはご苦労だった----」 お早うございます。言いつかった今日の仕事は、 もう済ませておきましたから

商人は、とくに縁起をかつぐものである。

れないし、 起きぬけの良い報らせに、旦那は、いたって機嫌がよくなる。その日は、 これで、 恒例となっているスキヤキ料理に使う肉の目方も、 すこしは増えるだろう。 追加の仕事は言いつけら

このように、実に要領よく、旦那と仕事をこなすようになるには、やはり、相当の年期が必要では

あ るけ れど……。

食べ物のことがつづくが、その当時、こんな面白い慣習があった。

稚たちにとって、イワシはたしかにご馳走にちがいない。しかし、 するというのである。それで、丁稚小僧は全部並んで食べさせられた。毎日、 たしか節分の日であったと思う。その日に、イワシの辛い糠漬を頭ごと全部食べてしまうと、 辛いイワシを頭から骨ごととなる 粗食に甘んじている丁 出世

これは相当に、顎と歯がしっかりしていないと食べ切れない。

おまえは、 私は歯には自信があったから、 必ず出世するぞ。 ٤ 言われた。よしんば嘘であっても万更わるい気はしない。こ 見事に平げてしまった。すると、 Н 那 から、

の言葉が、それからの仕事の励みにもなったように思う。 補給の一手段だったのかもしれない。 いまから考えてみれば、イワシを頭ごと全部食べるのは、栄養失調をおこさないための、

カルシウ

1

から骨ごと食べる。ことにアユなどは頭ごと食べないと食べた気がしない。 その丁稚時代からの習慣ではないけれど、 私はいまもって、イワシとか、サンマ、アユなどは、 頭

このように"イワシを頭から骨ごと食べると出世する"と言われていたのは、 全く根拠のないこと

ではないと思ってい

奴は、 私の丁稚時代の同僚を何十人か知っているが、思い出してみると、あのイワシを頭ごと食べきった 大抵生き残っている。最後まで残って、暖簾分けをしてもらうのは、二十人に一人か、三十人

に一人かであるが、このなかに必ず入っている。

がつよいということは、 身体強健につながる。 身体の弱い者は厳しい修業には堪えきれず、

で脱落してしまう。

いることになる。 あの辛い糠漬イワシを、じっと我慢し食べ切ってしまう中にこそ根性や逞しさなどを持ち合わせて これらの事柄は、いずれも〝出世〟ということと無縁ではない。無縁どころか、絶

は駄目だぞ、 こうしたことから、商売人として身を立てようと志すからには、これくらいの事が出来ないようで との教訓ではなかったかと思っている。

対に必要な要素とも言えるのである。

青春時代

女の噂をすれば耳を欹てる。そうしたことはいつもあった。そして一人で、あれこれ想像しては顔を 持っていた。 に全く興味がなかったからかというと、そうではない。やっぱり普通の若者のように、 私は若いときから女性とは、あまり縁がなかった。縁がなかったということは私自身が朴念仁で女 表を綺麗な娘が通れば、仕事をしている手をゆるめて、その娘を見送る。 つよい関心は

あかくしていた。

から積極的に近付いていき、その女性のご機嫌を取り結ぶといったことは、何となく面倒くさく、 在観念もあったし、それ以上に仕事のほうで頭の中は一杯だった。それに女に興味はあったが、 しかし私には、それから先へ進めていく行動意欲がなかった。女という未知のものが怖いという潜

にする手練もいた。そして何かの集まりがあると、その自慢話をよくきかされたものである。 仲 間のなかには、 こういった娘たちに積極的に声をかけ、親しくなり、次から次へとくどいてモノ

そんな話を聞いた直後は大いに刺激され、「よし、俺も一人くらい……」と意気込むのだが、

いざ

劫であった。

となると全身硬直した状態になり、声もまともに出てこない。

そのとき思った。やっぱり人には、それぞれ向き不向きがあるものだなあ・・・・と。

そうこうするうちに旦那から

お前も、もう結婚してもいい年頃ではないか。ぼつぼつ身をかためる気になったらどうだ。丁度

格好の相手がいるのだが……」

そういって結婚をすすめられた。

るから……」としきりに勧めてくれた。 あまあで、 その相手というのは旦那の弟の奥さんの妹だった。私も何度か見て顔だけは知っていた。 旦那の話では大変気立てがよく、 おとなしい娘だというのである。「きっと良い女房にな 器量もま

私は内心、 (わるい相手ではないな)と思ってはいたが、まだ女房をもらうということに心の踏ん

顔をした女性は私の好みではありませんから……」と、 言ってはいけない言葉がフラフラと口をつい すが私はまだ修業中の身で女房を持つなど考えたこともありません。それに、あんなバケツのような 切りがつかないし、何といっても〝照れ臭さ〟が先に立っていた。それでつい、「旦那さん、折角で て出てしまった。(縮尻った!)と思ったが、もう遅い。

「なんだっ! 誰の顔がバケツに似ているというのだ。家内の妹のことか?」

弟日 那の顔色が怒声とともに、さっと変わって私を睨み付けた。

私は思わず失言に身体を小さくした。かりにも弟旦那にとっては自分の女房の妹だ。〝バケツのよ

うな顔』と表現されては、いい気はしないだろう。怒るのは当然である。ただ、ひたすらに私は恭順

の意を身体であらわし、坐りつづけていた。

結局、その話はそれでお終まいになった。

である。 実は、 厳しいシッペ返しをされたのだ。これといった確たる証拠はないけれど、 私はそれでお終まいと思っていたのだが、旦那のほうでは気持のうえで終っていなかったの 私はいまでもそう

私も年頃、 自分から近付いて恋心をうちあける勇気はなかったが、"好きだ"と思っている娘がい

その女性は商売上で、よく出入りしていた店の一人娘なのである。

た

信じている。

とび抜けた美人というほどではなかったが良家の一人娘らしく、目鼻立ちがどことなくおっとりし

思い起こさせるに十分であった。 出合ったことがない。何かを見つめるときのその目のきらめきは、川底に沈んだダイヤのかがやきを ていて、 惚れ 肌の色が白くつややかであった。私が、つよく心を引きよせられたのはその神秘的な目であ た者の欲目でいうのではないが、それまで、これほど美しくて深い想いを湛えてい

私が初めてその目の輝きに接したとき、瞬間、 霊感のようなものが私の心をはしり抜けた。

ッとした。そうだ! あれだ!

同じなのだ。それを思ったとき、頰にふれる汐風と海の香りが胸に甦っていた。 それは私が商人として丁稚に入ったときから心の底に秘めつづけてきたあの伊勢の海のきらめきと

笑顔を見せると、その白い頰にかわいい靨を見た日は、私の心は一日中小春日和がつづく。 彼女と顔を合わせると挨拶を交わすようになり、私の男心はますます燃え立っていった。 ニコッと

私の心を変えるあの娘が憎い。

の進展がない。 それほど好きだ好きだと思い悩みながらも性来の女性に対する不器用さから、どうしても挨拶以上

ところが、人生には意外なとき、 棚からボタ餅が落ちてくることがある。

れたのである。 娘の店の主人から、 ある人を通じて〈養子に来てくれないか〉という話が旦那のところへ持ち込ま

尤もこれは一件落着後、 旦那から言い聞かされた話であるが……。

私が後で思うに、おそらくこの話は、あの娘から親に頼んだのではあるまい。いつも、 私の働きぶ

りを見ていた店の主人が、『この男なら』と見込んでの話だったと思う。

あっさり、まことにあっさりと断ってしまったのである。 彼奴は養子には向かん。三日もつとまらず飛び出してしまう」と私の意向を訊いてくれるでもなく、 このまたとない養子話に応対した旦那は、「あかん、あかん、養子の話なら本人に訊くまでもない。

あとで旦那から「おまえは養子には向かん男だ。わたしがよく知っている。だから、 おまえには言

そして、その相手が、あの店の一人娘であったと知らされたとき、私は卒倒するほどおどろいた。 わたしの一存で断っておいた。それでいいな」と聞かされた。

"わが初恋破れたり、"大魚逸したり、、そうした思いがひしひしと私の胸をしめつけた。

それから一、三日の間、私は嵐のように吹き去っていった運命のいたずらに、夜の眠りを何度か破

れたのである。

うまちがったのか、そ奴が私の初恋の女性を、 なのだ。私もよく知っている"女たらし"として仲間うちでは名がとおっていた奴だった。どこでど であろうはずがない。しかし、 ではなさそうである。 どうにか気持が落着いた数日後、冷静に考えてみると、これはどうもあの"バケツ失言"と無関係 余談だが、その後、この店には他からの養子が入った。ところがその養子というのがまことに心外 私は、 いまさらながら舌禍の恐怖をひしひしと身に感じたのであった。 いまさらどうしょうもなかった。 その汚れきった腕で抱いたのである。私の心は穏やか

私は旦那のいうとおり(俺の気性では養子はつとまらないのだ……)、そう自分に言いきかせ諦め

ざるを得なかった。

また、ある昆布屋の店から旦那へ私の養子話があった。この話も旦那の一存で私の知らないところで 世間で、一度あることは二度あるという。私の身の上に起こったことは、まさにそのとおり。また 舌禍の報いであろうか。

屋〟という店の旦那が、パッと店が一ぺんに明るくなるような娘を連れて入って来た。 それは、夏も終りにちかいある日の午後のこと。私が店で働いていると、 同じ昆布屋仲間で "つる

「よしどん。相変らずよく働いているな」そう声をかけ、土間に立った。

「これは、つる屋、の旦那。いらっしゃいませ」

娘が立っているではないか。私は眩しいものを見るように、咄嗟に目をすぼめた。 顔をあげておどろいた。目のまえに花が咲いたように、あでやかな絞りの振袖を身にまとった若い

「うちの娘だ。覚えておいてくれ」、一つる屋。の旦那はそういって私に娘を紹介した。

۲.....

娘さんがいたことも勿論知らない。旦那の顔だけは、どうやら覚えているといった仲である。 それはともあれ、今度はうちの旦那が帳場の中から声をかけた。 その『つる屋』という昆布屋には、 何も言えず、私は黙ったまま頭を下げた。なんと返事してよいか、 私はあまり行ったことがない。 声が出なかったのである。 だから、 その店にこんな綺麗な

「おう。 誰かと思ったら、つる屋、ではないか。親娘そろって何の用事だ?」

"つる屋"の主人は、帳場で旦那と小声で話しはじめた。

ある。 うがつよく目に映ったが、よくよく見ると意外に美しい。躰全体になんとなく女らしさが滲みでてい しているのが分かる。私もそれとなく娘を観察する。先程はどちらかというと、あでやかな振袖のほ 娘は上り框のところへ立ち、 もうすこし具体的にいえば、男に女を感じさせる。つまり肉感的、性的魅力があるということで 遠慮がちに店の様子を眺めている。ときどき、 私のほうへ視線をうつ

るような雰囲気を持った女もいる。 女もいるし、 街の中で見かける娘でも〝綺麗だな〟と思うだけで、男の本質的なものをそれほど揺り動かさない そうかと思うと、顔の方はそれほどではないけれど、何となく男の芯を突き動かしてく

る女である。 ま店先へ立っている。 "つる屋』の娘さんというのは、明らかに後者の雰囲気をも兼ねそなえて

て奥の方へ入って行った。うちの旦那も、すぐ後へつづいた。

うちの旦那と小声で話しながら、ときどきこちらを見ていた。つる屋。の主人は、やがて娘を連れ

手っ取りばやく言えば見合いのつもりだったらしい。 人娘、つまり店へ連れて来た娘である。〝つる屋〟の主人としては内々お互いを見せあうつもりで 口 同 様に後 で判明したのであるが、やはり私の養子の話であった。 相手は

この話も空中へ打ち上げられるまでもなく、旦那のところで早々に霧散されてしまった。

そのまま、この話は立ち消えとなったのである。

勿論こういった経緯は、 あとから旦那から聞かされた話で、やっぱり"バケツ失言"がついてまわ

るとしか思いようがなかった。

えの"女たらし"とはちがい、私とよく似たマジメな男だったことである。 この娘のところへは、 同じ昆布屋から養子が行った。せめてもの救いは、この養子に入った男が、ま

声をかけられた。ハッと顔を上げてその娘さんをみたものの、私は声が出なかった。不意のことでも 事をしていると、 フスで亡くなったということである。 ていたが、私が何も言わずにいるので、 また、近くに大家の娘さんがいた。いつも着物姿で楚々とした風情があった。私が隣りの倉庫で仕 胸が波立ち騒いで返事が出来なかったのである。それからも、しばしば子供を抱いて傍に立っ 兄さんの子供を抱いては遊びにきていた。ある夕方時分、とつぜん「よっさん」と いつか立ち去って行った。見かけないなと思っていると、

人であったためかも知れない。今でも、その娘さんの顔を美人薄命の言葉と共に、ありありと想い浮 あのとき、私にもう少し勇気があれば手くらいは握っていたのに----。しかし、これとて縁がない

かべるときもある。

b うこうするうち、私が召集を受けたのは全般の戦局が悪化しはじめていた昭和十八年十月。こんどは いう六月の或る日北海道根室町の旅宿へ電報がきた。徴用令、いわゆる"白紙"であった。飛んで帰 "赤紙"である。私が三十二才のときであった。このときから終戦の年、即ち、昭和二十年十二月ま 私の父は、昭和十八年四月十日に亡くなった。そして第二次大戦のその戦時下、梅雨に入ろうかと 昆布屋の店を離れることになったのである。 呼び出された軍需工場は愛知航空の大江工場である。毎日、電車にゆられて通勤していたが、そ

私が召集を受けたとき、家には妻と娘二人、その下に男の子一人、さらにお腹の中へ一人入ってい

何より気がかりだった。 私は店 0 仕 事のことも気にかかっていたけれど、身重の妻と幼い三人の子供を家に残しておくのが

うに自由に売買ができるわけではない。良い昆布を買い付けるためにあちこち走りまわったり、 てくれるものと思った。それに昆布も統制品となって、 の方は叔父も近くにいてくれるし、使用人もいる。あとをよく頼んでおけば、 お上からの割当てになっている。 なんとか切り抜け 品物

と価格を見究めるために血眼になって競争する必要もない。昆布の量も価格も、 めてくれる。 商人は、その定められた範囲内で商売をすればよい。それくらいのことは、 それぞれ 私がいなく に政府が定

ても十分やれるだろう。

児、これらを抱えた妻の日常を考えると不安と心配で胸がいっぱいになる。それかといって店をたた んで親元へ一時身を寄せるというのも、 くておろおろすることもあるまい。しかし、何といっても二人の小さな子供、それに生まれてくる赤 くれたし、妻の実家も近く(滋賀県滋賀郡和迩村)だったので、すぐに生活に困ったり、相談相手がな とはいえ、 家族のこととなると、そうはいかない。 なかなか困難なことである。 金の蓄えも多少はあったし、 叔父も近くに T

というとき、すばやい対応ができる。しかし、妻はそれができない。 女の身で、 軍需工場の集中している名古屋は真っ先に敵機の目標になることはまちがいない。 けである。私も戦地へ行けば生命の保証はないのだから同じといえば同じだが、一人身だから、いざ 加えて戦局の悪化で、敵機の本土来襲も万更予想されないことではない。そんなことにでもなれば 四人の子供を連れては逃げようがないだろう。そうなれば、妻子の身に死が待ってい 空襲でも受け るだ

く諦めたのである。 この心配と不安は、 内地を離れるまでつづいた。内地を離れてからは、そのことを忘れたわけでな

分かったとき、叔父と妻は子供たちの手を引いて最後の面会にやって来てくれた。 召集を受けた私は、 中部第二部隊 (元の六連隊)へ入隊した。いよいよ内地を離れるということが 風呂敷の中には私

の好きなウイスキーを薬ビンに入れ、そっと隠して持ち込んでくれた。

b それぞれの思いがこらえきれずにポロポロ涙を流 会所のあちこちでは、手を取り合ったり、子供を抱きしめたりして、 している姿が沢山みられた。 送るほうも、

らしはじめた。そのとき思った。 面 よこれが最後の別れになるのかと思い、急に不憫になって感情の嵐が胸 眼に溢れて、 私は、そのような光景を見ながら、 - そう心の中で誓ったのである。どうして妻と、あれだけの子供を残して死ぬことができようか。 さて面会時 どうしようもない。それを見て、必至で堪えていた妻までがクックッと嗚咽の声を漏 間が切れ、 別れるということになって子供たちのあどけない顔を見ていると、 (よし、俺は決してムダ死にはしないぞ。きっと生きて帰るのだ) (俺は決して涙なんか見せないぞ)と心に決めていた。 に込みあげる。 不覚にも

私が北支の戦場で何度か生死の境に立ったとき、この思いが私の心の大きな支えとなっていたからこ

生き残って来れたのである。

じまり、 かう 響で昆 昭和十八年十月だから八年あまりの年月が過ぎていた。その間、 布業界も大きく様変わりしていった。 昭和十六年十二月には大東亜戦争、 中村区牧野町で初めて昆布加工の店を開いたのは昭和十年五月。そして召集令状を受けたの つまり才二次世界大戦がはじまっていた。 昭和十二年七月には日支事変がは この戦争の影

ある。 昭 和 その前年、 十五年一月には愛知県昆布卸商業協同組合が結成された。 即ち昭和十四年九月十八日、勅令で「物価停止令」が出されてから、 これは物価統制令を受けてのことで すべての物資

価格とも商人達の自由裁量ではどうにもならない状態であった。そういうこともあって、 や価格に対する政府の統制は一段と厳しさを増していた。 昆布も例外ではなく、 統制物資として量

れた組合では昆布の共同加工場をつくることになった。

そして、そこへ昆布を削る大型機械を据えた。私はそこの工場長として昆布の加工と、その技術指

導に当っていた。

歯舞諸. な移入をはか この工場長時代、昆布の買付けと移入のために北海道根室、現在ソ連の占領地となっている国後島 島 、千島列島などの諸地へ出張した。そして現地の昆布事情を視察するとともに、昆布の円滑 ったのである。

資として広い需要があり、店の経営もマアマア成り立っていた。 このように、 戦時下では自由な商売が大きく制限されてはいたが、 昆布は戦線でも内地でも必需物

兵が三十三名いた。 そうした時、 私は召集を受けた。 入隊すると、 すぐに簡単な試験が行なわれた。 入隊は、先に述べたが中部第二部隊 その結果がどうかは分からないが (六連隊) である。 同 じ召集

私は「石川、お前が引率しろ」と命令を受けた。

とか、そういった一切の世話をすることになったのである。 軍 隊のことなど何一つ知らなかった私だが、命令とあれば已むを得ない。 同じ召集兵たちの支給品、 つまり、 衣服とか編上靴とか、或いは兵器とか、 それからは何も分からな 寝具とか、 食事

中部第二部隊で戦地へ行く編成を終えると、その年(昭和十八年十月十三日)、家に心を残しなが

6 か |内地をあとにした。行先は北支那であった。支那の港へ着いたのが十月十六日、そこから奥地 ったのである。 へ向

左雲付近の警備にあたった。 この 〈才五 から三日 航空軍十十五野戦 H の十月十九 H 、航空補給散〉 駐屯地 である北支那左雲県左雲というところへ着いた。 へ配属された。 さらに、 そこで新兵訓練を受けながら蒙 そして、 2

大 馬は大金を出して買い上げた。 みに その他作 昭 世 新 和十八年度の五 話も新兵の大切な訓練である。 .戦に必要な物質を輸送することである。 兵教 育は敵を目前にしながらの重機 原作戦にも参加した。 だから馬のほうが大切にされ、まったく人間軽視の軍隊であった。 当時、 主たる任務は警備もあるが、 兵隊は一銭五厘の赤紙 関 銃 輸送はトラックを使って行なうので、 0 訓 練であった。 重機 (ハガキ)一 には馬が 作戦 から から あ 枚で召集された 頭 n ば あ 体 てが 弹 力的 薬や食 わ

体 と皮だけになるほど痩せてしまったが、どうにか命だけは取止めた。 に合わなかったのだろう。食べれば、みな下痢してしまうので身体の栄養は全くとれない。 私 は 現 地へ着き、 しばらくしてアミーバー 赤痢というのに罹ってしまった。 北支の荒野というの やっぱり現 地 の水 時 いわ

何

度がは

匪

賊

や八路軍に攻撃されたが幸い、

大きな被害はうけ

なか

は比較的

軽いほうだった。しかし、

1,

つ匪賊

の襲撃をうけるか分からないので油断はできない。

ば たり、 のっぺらぼうで目標にするようなものがない。 ときに揚柳が生えていたりするだけである。部落から部落へ歩くときはそれを目印にするの ただ、 ところどころにボサ (芒の生えたも

対 明るくなり、 った。だが妻子を残して死んではたまらんと思い返し、 はじめたが、夜のことだからどこから弾丸が飛んでくるか分からない。 分からないが、 詳しい苦力が先導していたと思う。この重要な道しるべになるボサは、ときに二、三日吹きまくる 望である。 、側の土のくぼみに身を潜めていた。味方に、どんどん負傷者がでてくる。このままでは部隊は全滅 すると。 物すごい砂ぼこりに埋まって消えてしまうことがある。その時、その目印を見失ったかどうか ある夜のことだった。私たちの輸送部隊はトラックで進んでいた。 も馴れていないと見失うことがある。日本とちがい、北支の荒野で道に迷ったら、 突然近くでバンバンと小銃を撃つ音がしだした。敵の夜襲である。味方もすぐに応戦を 味方は丸見え。花火の打ち上がるのと同じである。 ある小山の雑木材の陰で小休止の命令が出た。 弾丸の飛んでくる方角を見きわめながら、反 私たちはトラックから降りて休んでい 私は、 これ 照明弾が打ち上げられ は 勿論、この辺の 6 よい よ最 後かなと思 もう絶 て空が 地

それで、こちらのほうもホッとした。 すると、 どういうつもりか急に敵は退却しはじめた。 この戦闘で隊長が負傷し、命は取り止めたものの腕を失くした。 明るくなると不利だと判断したにちが

味方もかなりの損害を受けていた。

するかもしれない。

そんな烈しい銃撃戦をつづけているうち、

やっと夜が明けてきた。

やってくるのが見えた。 幸い天気はすごくおだやかで、そよ風の中を二時間ばかり進んだ頃、はるかな地平線に馬 夜がすっ り明けるのを待って、 (あれっ、何だろう?)とトラックの上から吞気に眺めていると、 また進みはじめた。 私には方角など全く見当もつかなかった。 お前ら

慌てで、 なるのか、 動 早く降りて隠れろっ。あれは敵だぞっ!」と叫ぶ声が聞こえた。銃を持たない私は、びっくりして大 うつもりなのかクルリと反転して退がる。 ンパンと銃を撃ちながら馬を走らせ、こちらへやってくるが、私たちのすぐ前までくると、どうい |車隊の持っている武器といえば短かい小銃だけなので心細いといったらなかった。ここでお陀仏に 地上へ飛び降りると、 と内心覚悟を決めていた。 土のくぼみへ転げ込んだ。味方の兵隊が十名あまり応援はするが、自 ところが、五十頭くらいの馬に乗って襲撃して来た八路軍は

か、 あのまま突っ込んで来られたら、 いまだに分からない。 おそらくいまごろ生きてはいなかったろう。なぜ反転し退いたの

伏が果てしなくつづく丘のところどころに芒 がかたまって生えているだけ。あとは赤茶けた砂土の肌 外れのほうだったのではないかと思う。 がのぞいている。こういった風景をじっと見ていると、文明など、どこかへ吹きとんでしまうのであ とになった。 その後、昭和十八年の十二月から十九年の三月の終わりまで新たに「召君墳」付近の警備もするこ この付近はもうソ連領に近いモンゴル地区で、見渡す限りの大草原。 大草原といっても一面、草が生えてるわけではない。 多分、 ゴビ砂漠の 緩

3

戦 地での見聞記

私たちが新たに警備することになった、この「召君墳」という所には一つの廟がある。 廟というのは支那の墓である。墓といっても土民のではなく、 由緒ある人を葬ったところに建

てられたものである。土を高く盛って小山のようにし、その上に建てられていた。 「召君」という女性が葬られていると伝えられている。この「召君」という女性については

面白いと言うか、哀しいと言おうか、物語があるのでお伝えしておく。

廟には

昔、といっても、 何時ごろの時代かははっきりしないが、この地方を支配していた王がいた。この

王には正式の后のほかに、沢山の夫人がいた。

とうが、 社会的 この地方の風習では、一夫一妻という制度ではなく、 に咎められることはなかった。まして、国王ともなれば、何十人、 男の能力さえあれば、何人の夫人を持 何百人の夫人を持

この国王の夫人選びがひと味変わっていた。言わば風流であった。

とうと、

誰もなんとも、言わない。

いだろうという女性を、 かじめ、 国王の側近たちが国中を探し歩き、 沢山、 おそらく何百人だったろう集めてくる。つまり夫人の候補者である。 この女性なら国王の夫人になっても恥ずか

国王はこの女性たちに、それぞれ好きな絵を描かせ、王のところへ提出させる。

|王はその絵を一枚一枚眺めながら、気に入った絵があると、その女性を召し出し伽をさせる。

候補者にあげられるような女性は、いずれも絶世の美女ばかり。それに、知識や教養も高い。国王 教養もいずれ劣

絵を描かせること

らぬとあっては、どの女性を選べばよいか分からなくなる。そういったことから、 としては、一人々々に会うことも大変だし、会って見ても美女ばかり。それに知識、

を思い付いたのかも知れない。

まり、

第何番目かの夫人にするのである。

んなことには関係なしに自惚れと名誉欲、金銭欲、加えて嫉妬心をもっている。尤もこういったこと 女性というものは、美女であろうと、なかろうと、また、教養や知識があろうと、なかろうと、そ

は男にも当て嵌まりまするが……。

って召しだされたい、誰よりもはやく。そういった思いが胸中にある。 国王夫人の候補者に選ばれた美女達も例外でない。わたしの描いた絵が一日も早く国王の目にとま

に中傷しケチをつけるか。そういったことに心を砕くのである。 そのためには、 どうしたら国王の目にとまるような絵が描けるか。その他の女性が描いた絵をいか

ある。ひたすら、それのみを願って生きていく運命にあるのだから。 補者という一つの檻に閉じ込められた彼女達にとって、 そうまでして――と考えられなくもないが、もう一歩ふかく考えれば、ムリもない。国王の夫人候 唯一の生甲斐は、 国王の目にいつ止まるかで

その選ばれた美女たちの一人に「召君」と呼ばれる女性がいた。

く考えない。むしろ、自分は一生このままでもよい。一緒にいる女性たちのように一日も早く召し出され て、その喜ぶ顔を見るほうが余程嬉しい。 いながらも、先ず他の女性のことを考えてやる。他の女性より一日も早く王に召し出されたいとは全 この「召君」の美しさはいうまでもない。それに人一倍心が優しい。自分がそういう運命におかれて

かの絵師に、賄賂を贈って絵を描く特別指導をうけたり、書き添えてもらったりというようなことは 切しない。 こういった心がけだから、絵を描くにも非常にさらりとしている。ほかの女性たちがお付きの何人 ただただ自分の心のままに筆をとり、紙にはしらせるだけである。

みにつけ込んで、特別指導と称して肉体まで自由にする。だが、賄賂もくれないし、要求にも応じな お付きの絵師たちも、よく心得たもので賄賂の多寡によって手加減をしたり、また、美女たちの弱

い「召君」には全く寄り付こうともしない。

た。そして「召君」を后に譲ってくれと申し入れたのである。 こうした「召君」の噂をどこから伝え聞いたのか、あるとき、隣国の王が国王のところへやって来

たちにとっても大変名誉なことであるということで心よく承諾した。 不利ではないと考えた。まして我国の女性が隣国の王の目にとまり、所望されるとは、 「召君」のことをよく知っていなかった国王は、隣国と仲良くすることは、 我国にとっても決して

そして、「はて? それほどまでに隣国の王が執心したという "召君" とはいったいどんな女なの

か。一目見たい」と、思って面前へ呼び出して見て非常に驚いた。これまで、 何百人と見飽きてきた

美女達とは、まるでちがう美しさと気品をそなえているではないか。

と悔んだがもうおそい。いまさら譲れないと破約すれば、 国王は「召君」が急に惜しくなった。すぐに譲ると約束せず、一度顔を見てからにすればよかった 隣国の王と険悪になる。忌いましい気持で、

しぶしぶ「召君」を隣国へ旅立たせた。

この地でしばらく留まることになった。

川は増水期で、 「召君」は隣国へ行くために、国境を流れているこの川のところまでやってきた。ところが、丁度 川幅は広く、濁水は渦を巻いて流れており、とても渡ることはできない。已むなく、

せ細り、とうとう隣国の土を踏むこともなく儚くこの世を去っていったという。

しばらく留まっているうちに、この地の水が身体に合わなかったのか、病を得て見る見るうちに痩

も言われている。 伝えられる一説では、 「召君」を惜しんだ国王が、嫉妬のあまり、密かに刺客をおくり殺させたと

た土地の 人が、この地にあつく葬り廟をたて、その霊を慰めてやったというのである。

ともあれ、生まれついた美貌がわざわいとなって、あたら若い生命を落とした「召君」を哀れ

それがずっと現在までつづいており、地名もいつの頃からか『召君墳』と呼ばれるようになったと

廟のある小山の上へのぼると、ときどき白い蛇を見かけるとも伝えられていた。 この白 い蛇蛇 いう。

えると必ず恐ろしい天変地異が起きると言い伝えられているからである。 は死んだ「召君」の化身か、それとも守護神か、地元の人は恐れ、大切にしている。白蛇に危害を加

この伝説にある川というのは、 現在でも流れている。 黄河の上流に当るのだろう。

滔々と白く濁った水流は絶えることを知らない。

舟とは変っていて、丁度、たらいを大きくした格好のものだ。支那人の船頭が、長い竹竿をもって氷 の上を安全を確かめながら舟の乗り場まで案内する。 余談だが、私も春先、この川を舟に乗って渡ったことがある。あちらの舟というのは、日本で見る

うに安定性がないので、 して川の濁水に吞まれる。私も乗ってから降りるまでビクビクし通しであった。 氷の上を渡り、舟に乗ると櫂を上手に使い、そのたらいのような舟を漕ぐ。しかし、日本の舟のよ 氷がガラガラと流れてくるのを避けながら漕いでいく。 一歩あやまると転覆

この川も冬季にはすっかり氷に覆われ、トラックに乗って悠々通れる。

Ш が集ってくる。 つまり支那本土方面からはチャン馬という小柄な馬に米とか塩とか衣料とか、そういった生活物資を 川を渡ったところに包頭という集落がある。ここは昔から物々交換のため、多くの農民や商 ほど積んで来る。そして、この包頭で互に必要なものと交換する。 川上の方、つまりモンゴル地区からは、馬とか狼とかの獣の皮を持ってくる。 川下、

この物資を狙って、 よく匪賊などが出没する。そのため、 日本軍が駐屯していた。

私が自動車でこの包頭へ行ったのは、確か十二月だったと憶えている。

夜間の行動だったので凍結

した川の上を通ったのだが、そこが川だったとは全く気付かなかった。曠野の上とばかり思っていた。

川の上に物資を満載したトラックが通れるほどの、厚い氷が張るのだから、その寒さはおして知る この地方の寒さには全く閉口した。

べしである。

常識というのは、まあまあその辺までであった。それが一挙に零下四十度という寒さの中へ放り込ま 私がいままで経験した寒さといえば、せいぜい零下十度くらいまで、寒い、ということへの感覚や

か、 正直いって参った。参ったというより、最初は恐怖のほうがつよかった。大袈裟な表現かもしれない この地方で零下四十度というのは、そう珍しいことではない。しかし日本人の私は、この寒さには 身体全体が凍りついてしまうのでないか、眠ったまま凍死するのではないか。本気でそう思った

ものである。

四十度といっても、そう怖れる寒さではないことが分かり、やっと安心できた。 しかし、生活をつづけるうちに、その寒さにも次第に慣れてきた。しっかり防寒しさえすれば零下

う。 必ず防寒をして出ないとすぐに凍傷にかかる。小便などは、下手をすると放出する先から氷柱になる。 その点、現地人は寒さに強い。やはり生まれてから、徐々にこの寒さに慣らされてきたからであろ 私たちのように厚い防寒をしなくても、 日本の寒さの中で動きまわるようなつもりでいると大変である。家屋の外へ出るときには 平気で酷寒の中を出歩いているのには驚かされる。

る。最初はそこが川の上とは知らず、てっきり井戸だとばかり思っていた。夜のことではあるし、足 私たちは、 命令で夜トラックへ乗って凍結した川へ水汲みに通うことがあった。厚い氷の上をトラ ところどころ氷に穴があけてある。その穴から桶を下ろして川水を汲みあげるのであ

元が氷だか土だか、よく見分けがつけられなかったのである。

向うのは地面と同じでのっぺらぼうになっているので、 いていない。日本の井戸だったら必ずと言ってよいほど枠を入れ、地上何十糎か突出している。 汲みは川の上だけではなく、陸の井戸でもやらされた。あちらの井戸というのは枠が地上にのぞ うっかりすると落ち込んでしまう。

私は冬になってから現地へ行ったので、大地も、井戸も、川も完全に凍結していた。

いくら寒くても井戸水が凍るということはまずない。向うでは零下三十度くらいになる

本では、

と井戸水の表面が凍ってしまう。穴をあけると下から井戸水が噴き上げてくるが、その水もすぐに凍

まう。 は澪さないよう注意しなければならない。 風が強いので、井戸で水を汲みあげるときは、その動作をはやくしないと穴の上に次から次へと氷 この凍 ついには汲めなくなる。また汲み上げた水を地上に澪すと、またたく間に凍りついてし た氷で軍靴がすべり、 運の悪いときは井戸の中へ落ち込むことがあるので、 汲んだ水

その時、驚いたことがある。向うの井戸というのは随分広い。冬の間水汲みに行き、土だとばかり 春の三月、四月ごろになると、この凍りついていた大地も、川も、井戸もやっと融けてくる。

思って悠々闊歩していた水汲み穴の周辺は、 おどろいたことにすべて井戸の上だったのだ。 厚い氷の

お かげで落ちこむことはなかったが、何とも薄気味わるく肝を冷やしたものである。

水汲みにハンマーやスコップを持って行くと言えば変に思われるかもしれないが、 あちらでは、

季の水汲みには絶対欠かせない用具なのである。

酷寒ということで思い出されるのが、軍歌での〝銃に氷の花が咲く〟という言葉である。あの文句

は、

まさに事実であった。

ハーッと息を吐きかけると、 は重機関 銃隊にいたので、 よく銃の手入れをしていた。そのとき屋外に持ちだした機関銃の銃身 瞬時にして表面に氷が張ったのである。 これには驚いた。

の銃身に素手で触れようものなら剝がれないばかりか、すぐに凍傷になる。

よく言

b

"三寒四 のような暖かい日がつづく。それだからこそ、私など寒さに強くない者でも何とか過ごして来られた 酷寒といっても冬季間中、 " なのである。 つまり、三日くらい寒い日がつづくと、そのあとには四日くらい ずっと零下何十度という寒さが連続するわけではない。 小春日

のである。

私が 保 勤務を命令されたのは重機関銃隊にいた時だったと思う。

酒もあるし、 ご存知の方もあろうが、軍隊の〝酒保〟というのは兵隊たちのためにある隊内の売店のことである。 菓子もある。 砂糖や小豆、 それに缶詰など必要と思われるものは一通り揃えてあった。

こういった品物を売るのと在庫の管理をするのである。

酒保勤務というのは、

77

入荷した数、売った数

金額、 在庫数とをいつも明らかにしておけばよい。軍隊の勤務のうちでは、もっとも楽だったと思う。

そんな私が現地で病気になったのは、昭和十九年十二月二十二日であった。

この日からすぐ入院したのではない。あとから二十三日が発病日と診断されたのである。

発病から入院までの経緯を記してみる。

しかし、

それで、そのまま勤務をつづけていた。 な気がした。しかし、身体のどこかに痛みがあるわけでもなく、とくに気分が悪いということもない。 十二月二十三日頃から何となく身体にだるさを感じていた。そして、食欲もすこしなくなったよう

申し出るとすぐ受診するように手配してくれた。私は、ちょっとした風邪だろうくらいに考えていた 寝汗をかく。なんとなく右胸部に痛みを感ずる。どうもおかしいと自分でも思った。それで、 から、軽い気持で軍医のところへ行った。 二十七日頃になって、そんな状態のまま軽い咳がでるようになった。加えて、 いままでになかった 上官に

軍医は佐藤という若い見習士官だった。

うと告げられた。私は入院と聞いてびっくりした。それで、 とおり診察が終わって、二、三日様子を見てから、 病状によっては入院しなければならないだろ

「気分はいいから入院はしない」

その時は隊へ戻った。

私が入院したくなかったのは、近いうちに上等兵へ昇進する命令が出ると内々聞いていたからであ

る。いま入院などしたら昇進は駄目になる。

のところへ行くと、 そうして二、三日病状の変化を見だが、一向に良くはならない。毎日、三七度二分くらいの熱が出 自分でも、だんだん病状が重くなるような気がして不安になってきた。二、三日経って佐藤軍医 「おまえはすぐに入院しろ」と、いうことになった。

私にとっては上等兵昇進を棒にふっての入院であるから、決して嬉しくはない。泣く泣くの入院で

ある。

とになったのである。 しかし人の運命というのは、どこでどう変わるか分からない。この入院が私の命を救ってくれるこ

発病したとき駐屯していたのは河北省大興県五里店という所で、所属部隊は第五航空軍策十五野戦 私の病名は 〈両肺門腺炎〉。発病の原因は軍務の過労によるものと診断された。

航空補給廠第二勤務隊である。隊長は山口宗二という陸軍中尉であった。

かかった者は夏の服装を支給され南方へ向かったらしく、 度の編成で第一線へおくられた。第一次の編成は、私の入院が決まったすぐあとだった。この 昭和十九年の末といえば、戦局は日本の敗色がますます濃くなってきた時分。私たち召集兵も、一 全員死亡した。私は、第二次編成のときも

入院で残された。あとで考えてみて、ほんとうに運が良かったと思っている。

緒に行った召集兵で現在生き残っているのは、私と、あと一人いるだけである。戦後、街で出会

おまえ生きてたのか。良かったなあ。 あとの連中は皆死んでしまったぞ」

と、言っては幸運を喜び合った。

その男が命拾いした理由もまた運につながる。

た。用を足して戻ってきたが相当酔っているのと大変混雑していることで、 店で飲んでいるうちに小便へいきたくなった。腰の帯剣が邪魔になるので、 別れだというので半日の休暇命令が出た。よろこび勇み、皆して街へ飲みにでかけた。そして、 なってしまった。 はいよいよ南方へ行くというときで、その男も編成の中へ入っていた。いよいよ、ここともお それを外して便所へ行っ 外した帯剣が分からなく

したが無いので「えいっ、 その男は平素からすこし大まかなところがあり、何事も出たとこ勝負といったような奴だった。探 面倒だ。何とかなる」と丸腰のまま、 また飲みだした。

市内巡回の憲兵がやってきた。そして、丸腰なのを見咎められて詰問された。

そこへ運の悪いことに(これがあとで考えれば運の分かれ目。命が助かる幸運となったのだが)、

すると、 に酔ってはいるし、元々大まかな男だから、 いきなりその憲兵を張り倒した。 まともな返事をしない。怒った憲兵が連行しようと

つまり罪人を徴罰するところである。 当時、 ただで済むはずがない。 軍隊で憲兵といえば泣く子も黙ると言われたほど怖い存在である。その憲兵を張り倒したの 即刻、 営倉入り。営倉というのは軍隊での留置場か拘置所に当たる。

だが、この男は営倉入りのお陰で編成から外され、死を免れたのであった。

げに人生とは不思議なものである。

さて、 入院の命令を受けた私のほうは、その足で陸軍病院へ行った。

何事だろうと行ってみると、 大佐の襟章を着けた偉そうなのが、

ところが入院診断を終わって病室へ帰っていると、そこの病院長である陸軍軍医殿から呼び出しが

「大したことはない。お前はすぐに退院だ」と言う。

入院した矢先に退院とは、おかしな話だとは思ったが大佐の襟章には逆らえない。

方、退院できることが無性に嬉しくもあった。それで大佐殿に「はい」と挙手の礼をして病室

「隊長から退院だと言われた」と、報告すると「ツベルクリンの注射をしているから

帰り、

看護婦に

ということになり、そのまま入院をつづけるうちに八月十五日の終戦を迎えたのである。 二週間は退院できない」と再び足止め。なにがなんだか分らなくなった。また、このツベルクリンと いう注射などもどんな注射かよく分らないし、注射したあとが何とも痒くて仕方がない。 んで搔いたら大きく腫れてしまった。そして検査を受けたら「これは陽性だ。 退院はできない」 看護婦の目

終戦になると、 私たちは比較的環境のよいところへいたので、日ならずして太沽だったと思うが、

そこに集結した。

ためである。私たち戦病兵はこの船で民間人と一緒に内地へ帰れることになった。しかし全員ではな の窓から見ると港が見える。アメリカの船が三隻入港している。民間人を日本内地へ送還する

い。病室では

「俺は帰れるらしい」

「いや、おまえは軽症だから後まわしだ」とか喧々囂々だった。

私が病床へ寝ていて親父の夢を見たのは、そんなときである。

「その格好はなんだ。しかし、よく帰って来た。とにかく上がれ」 くたびれた軍装に外套、それに雑のう一つで私が親父のまえに立っている。すると親父が、

と、言ってくれたところで日が覚めた。

いない)と、心が躍った。あまり嬉しかったので隣の奴に言った。

途端に(これは正夢だ。おどろくほど夢の映像がはっきりしていた。そうだ、内地へ帰れるにちが

「おい。俺はこの船で帰れるぞ!」

「え?石川、おまえ軽症じゃないか。帰れるもんか。俺は重病人だ。まちがいなく俺が帰れる」

と、こう反撥するのである。

内心正夢だと信じながら、絶対だという自信まではない。

やがて内地復員兵の発表をするというので、全員病院の庭へ集められた。

る。名まえを呼ばれた者はパッと面をかがやかし、涙を流している者もいた。 自分は帰れるだろうかと、誰もが不安気な顔で集って来た。送還者の名まえが次々に読みあげられ

私はいつ「石川」と、呼ばれるかと心を弾ませながら待っていた。が、一向に名まえを呼ばれない

いう名まえがとび込んできた。思わず心の中で(やったっ!)と叫んでいた。最後から三番目であっ (やっぱりあの夢は正夢ではなかったのか)と、 自信を失いかけていた私の耳へ、突然 「石川忍」と

考えるに、第一次送還者は中症患者が中心だったように思う。

と思っていた者は、直ぐに動員されて付近の鉄道警備に就かされたからである。 私の隣りのベッドの兵は重症で精密検査が必要だという理由で残されたし、軽症で真っ先に帰れる

九州の小倉陸軍病院に収容された。

私は昭和二十年十一月十九日、

とができた。 を許可されたとき、 さつま芋を一貫目ほど蒸してもらったのだが、そのとき残った金は幾らもなかった。しかし、 かし何日 週間くらいは何とか保つだろうと足どり軽く、もみくちゃになりながらも、とにかく汽車に乗るこ そして十日後の十一月二十九日、退院を許可され、夢にまで見た名古屋へ復員したのだった。退院 で日的地まで着くやもわからないと聞き、 湯呑み一杯の米と百六十円の現金、それに目的の駅までの切符を支給された。し 小倉の街はずれの農家に行って米を飯盒 に一杯、

のは先記のとおりである。米軍の貨物船が三隻入港していたが、まず驚いたのはアメリカ兵士の楽々 入ったからである。 途中、神戸の街でも焼け跡だけが印象的だったのは、駅前の「南無妙法蓮華経」の大きな石碑が とはいえ、考えも何も湧かない。ただ、ポカンと見ていただけであった。 これより先、 復員乗船のため日本人引揚者と共に太沽という港に集結させら

とした挙措動作であった。小さなカービン銃を肩にチューインガムをパクパク、軽くて暖かそうなジ ヤンバーを着て長めの編上げ靴。いかにも軽快な服装で、乗っているジープは狭いところでも走りま

情けない思いがしたものだ。この米兵の服装を見ただけで、 も行動不自由な重装備の日本兵はかなわない。しかし、戦争が終った今、どうでもよいことだったが ころは馬の世話までした。 私達の北支での服装は防寒襦袢、 兵隊は毎日々々、重労働である。この米兵の楽な服装にくらべると、 防寒外套、 防寒単靴、 それに大ぶりな三八銃。 戦争は無理だったとつくづく悟ったこと 重機関銃隊 1=

別れ別れになってしまった。あわただしい別離だったが、生きていたらもう一度会ってみたいもので あ になる。 『伊藤』という男がいた。応召前は愛知県庁に勤めていると話していたが、 3 それはとにかく、 そして私同 重病でもないのに病人として取扱われた私が内地の土をいちばん早く踏んだわけ 様、 この固苦しい軍隊生活 から脱けだしたくて、 特別診断を受けたもう一人に、 小倉の病院を出てからは

また、私の使命がこの世に残っているからに違いないとも思った。 こうして、生きて再び故国の土を踏めたのも先祖の守護のおかげであり感謝せずにはおれなかった。

妻と子供たちは滋賀県滋賀郡和迩村の妻の実家へ身を寄せていたからだ。 昭 和二十年十一月二十九日、 小倉の陸軍病院を退院した私は、 滋賀県の妻の実家へ向かった。

色とブラウス。ちぢれた頭髪をおおうネッカチーフ。厚化粧をした肌。毒々しい唇の色。絶え間なく 見るように大きく目をひらき、その女の姿を見つめた。原色を混ぜ合わせたような派手なスカ この女も日本人なのだ、 L その車上に外人と見まちがえるような服装をした日本人の若い女が同乗していた。 追い散らすように、アメリカ兵の乗った米軍ジープが走りまわっていた。ジープが近づくと日本人達は急 いで道路わきへ固まり、車上の兵隊へ恐怖とも羨望ともつかない視線を投げかけている。ときおり、 いているガムを含んだ口。そして私には全く訳の分からない言葉で米兵に語りかけ、 れていた。 (これが日本の女なのか?)----。 男も女も大きな荷物を背に負い、手には袋や風呂敷包みを提げていた。 かっての軍都・小倉の街には軍服姿の敗れた軍人たちと、もんぺ姿のやつれた女たちで まちがいない。 私は、 あらためて街を行くもんべ姿の女たちに目をやった。 私は珍しいものを その日本人達を 嬌声をあげて ートの

私の頭は混乱した。どちらの女が本当の日本人なのか?。これから彼女たちはどうなるのか?。

れからの日本はどうなる?。昆布屋の商売はできるのか?。 とりも直さず日本敗戦という思わざる事態に直面した私の心の中の戸惑いでもあった。 店はどうなっている?。 それよりもなに

よりも、明日からの家族の生活はどうなるのだろう。

であ かされているのだ。ただロボットのように日本人は右に左に、行けといわれる方向に歩いているだけ 外国の支配下におかれているのだ。 日本全体が、これまでの目標や支えを失って虚脱状態にある。 政治も、 教育も、 すべては日本人の意志ではなく米軍の意志で動 米軍の占領という、 有史以来初めて

眠 いても、 り込んだ夢の中でも、その想いが私の頭を休めなかった。 私は これ 車窓に板を打ちつけた足の踏み場もないほど乗客を押し込んだ列車の中でも、 から俺はどうすればよいのだ)と、そればかりを考えつづけていた。 小倉の街を歩 そして疲れて

を思いめぐらせていたのである。 私の心は既に決まっていた。 ただ、これからどうしてそれを実行して行こうか、 それだけ

丁稚時代の苦難 私の人生から昆布を取り除いたら、 にも堪え、 眠る時間を割いてまで昆布職人としての技術を磨き、商売のやり方を覚え あとには何も残らない。 私は昆布屋として生きるためにこそ、

て来た。

は昆布を通じて社会に貢献し、昆布と共に人生を歩んでいく宿命をもった男だからである。そうしな その私から日本の敗戦であろうと、 米軍の占領であろうと、昆布を取りあげることはできない。

1+ 和 ばならない。 「内地に帰れたら社会に貢献しよう」……と。 また、 それが出来る男が私だと信じている。 さらに、 そのことは死んだ戦友との

とながら民家も、 10 30 L 出ていた。家を焼かれたこれらの人びとは焼け跡に堀っ立て小屋を建て、そこで雨路を凌い していた重要な軍 i, 何度か米海軍の機動部隊から発進した爆撃機によって激しい空襲を受けていた。 殆 そのとばっちりで大きな被害を受けていた。 んどの人は知 需工場は次々に破壊焼失し、そしてその機能を停止させてい 人や親威を頼って遠く近くに仮住まいしてい 家屋の焼失は言うに及ばず、 た。 多数 4 東海 然 地

私の 私は 住居や工場 6. ろいろ考えた末、 も昭和十九年八月の空襲で焼失していた。幸い、 あとのことを叔父に頼み、妻の実家がある滋賀県の方へ子供を連れて 妻や子供達は 逃げ てい て無事 であ

疎開したのである。

時 は うであったように、 に入れ ざかりの子供を四人も抱えた妻の苦労は大変なものであった。農業をしている実家の援助があると 疎 球等々の日用品など生活するのに必要な物資はすべて配給制 開 先の、 るしか方法がなかった。 生産するものそれ自体が厳しい統制下にあるので、 妻の実家での生活は苦しいものだった。その頃は、 自分たちの生活が精一杯でとても他人の暮らしを助けてやる余裕などなかった。 砂糖、 塩 しかも一度に入手できる量はほんの僅かで、 醬油 油 酒、などの食料品はもちろん、 これには限度がある。 か、または何 もう日本全体が物がなくなっ 時間 衣料品やチリ紙、 とても十分では も長い列に立って手 加えて日 本全国そ ていた

実家も安住の地ではなかったのである。ずい分、あることないことを都会者の仕業にされたもののよ こちらの ものは欲しい。腹が空いたら食べたい。当然のことである。そのため事実はともあれ、 くから配給の列に並ぶことも難しい。しかも大人なら我慢もしようが、子供には通用しない。 子供を抱えていれば、物を求めて自由に歩きまわることもできない。僅かな品を手に入れようと朝早 トマトを盗った」とか 一細なことに対し、 〈都会者〉も白い目で見られ、実家の父まで肩身の狭い思いをする。妻や子供たちにとって 一いち争っても仕方ない。ただ頭を下げるだけである。挙句の果てに、 「柿を盗んだ」「大根を抜いた」、そういった苦情が度々もち込まれた。そん 「うちの畑 あちら 欲し 0

私は病院生活をしていたので、物が不足していたことは感じていたが、内地での妻や子供たちの、

うであった。

そういった日常生活の様子までは知り得べくもなかった。

から意外なことを言い渡されたのである。 やっと超満員の列車を乗り継ぎ、ようやく滋賀県の妻の実家まで辿りついた。そして、そこで義父 妻の実家を訪 ねたら半月ばかり、そこで静養させてもらうつもりでいた。

家の戸口に立った。十一月の終りといえば、もう夜は冷え込む。 は軍の外套を着て雑嚢を肩に掛け、妻や子供たちの喜ぶ顔を想像しながら胸をふくらせて妻の実 琵琶湖の湖面を吹き渡る風も、 すで

案内を乞うと奥から義父が出て来た。

に冬の近さを思わせる。

おお、よく帰って来られた。ながい間ご苦労なことだった。 さあ、さあー」と言って義父に迎え

入れられた。その声に妻や子供たちも奥からとんで出て来た。

入院中、子供が一人亡くなっている。 昭和十八年十月、中部才二部隊の面会所で別れて以来、三年ぶりの再会である。悲しいことに私が

Bul と呼び起こしてくれた。そこで、ハッと目が覚めたのである。 と思った。そこで『化け物、化け物』と必死に呼んでいると隣にいた戦友が、 ていたようだったが急に化け物、化け物と叫びだすものだからびっくりしたぞ」と言う。 青に変わった。そして、ブルブル震えていらっしゃる。私は、これはてっきり化け物にちがいない 一弥陀様が立たれた。 この亡くなった子供が死んだ頃、私は病院でそれを報らされるような夢を見ているのだ。 それは、私が北支の病院にいる時のことだった。夜中の一時か二時ごろだったと思う。 私が一所懸命その阿弥陀様に手を合せ拝んでいると、急に阿弥陀様の顔色が真 戦友の言うには、 「おい、 「なにかにうなされ 石川どうした 私の夢枕に

(これはあまり良い夢ではないな)と私は思った。ひょっとすると?⊠-----そう思っているところ

妻から便りが届いた。

やっぱり、 知らすまいかと思ったが」と断りながら、子供の死を報らせて来た。 あの阿弥陀様は子供の死んだのを知らせて下さったのだと思った。

父が私を呼んだ。そして、言いにくそうに口を濁した。 そんなことを回顧 しながら、 私と妻と子供たちが一しきり涙を宿しながら積もる話を終えた頃、

義

「帰ってくる早々で、ほんとに悪いのだが、明日にでも皆を連れて名古屋へ戻ってもらいたいのだ

カ

やっと自分の怒りを鎮めたのである。 ったが長い間妻子が世話になったことではあり、事を大きくして、これ以上実家に迷惑をかけてはと だが妻から、 私はあまりに意外な義父の言葉に、しばらくは口もきけず、呆然としてその口許を見つめていた。 前記したようないろい ろの事情を聞いてはじめてその理由が分かった。ずい

父である私だけだと思うにつけても自分のことなど考えてはおれないと心に鞭打って励ました。 義父の家を出た。精神的にも肉体的にも疲れてはいたが、妻や子供達が、いま頼れるのは夫であり 大津から京都へ、そしてその夜は途中の駅で過ごし、 そうまで厄介者視されてまで、ここへ居ることもないと思った。 翌日やっと名古屋へ帰り着いた。途中でさつ 翌日、 あわただしく荷物をまとめ

復員するとき支給された百六十円ばかりの金も食糧や汽車賃などを支払い、残っている金はたった十 円だけだった。この十円を元手に、明日から親子四人が生きていかなければならない のだ。

まいもを一貫目五十円、米を一升五十円でヤミ買いして持ち帰った。当座の食糧にするためである。

私は真っ先に叔父のところへ行ってみた。その頃、 「良く戻って来た。待っていたぞ。組合からのものは全部俺が預かっている。 叔父は昆布加工卸商組合の理事長をしていた。 これからどうする?

私の店と工場のあった付近は、完全に焼野原になっていた。

十三才で叔父の店へ丁稚小僧で奉公し、

学校へも行かず、遊びもせず、ただ一筋に商人への道を歩

なく消え去っているのだ。いったい、いままでの努力は何だったのか。汐風の音を聞きながら、 感に打ちのめされていた。 ゆる苦難にじっと堪えつづけてきたのは、この廃墟に立つためだったのか。私の胸中は、 十五才で独立。 みつづけ、京都へ行っては、寝る時間も惜しんで昆布削りの血の出るような修業、そして、やっと二 それから八年営々として築き上げてきた私の昆布へ賭けた情熱の城は、 つよい挫折

人生僅か五十年、いま私は三十五才。残り少ない人生で再起できるのか。私の昆布へ賭けた夢は実

現出来るのだろうか。

うと生い茂り、迎げば月が朧ろに見えた。 ていたのは 私は工場焼跡の土をぐっと握りしめながら、身じろぎもせずに考えつづけたのである。 モーターのコンクリート台と工場建屋のコンクリート基礎だけ。辺り一面は芒がぼうぼ 焼跡 に残っ

りきったことを悟るのに、私は随分と時間を無駄にしたように思う。 そうして、 焼跡に暗くなるまで立ちつくしていた。 やっぱり私の人生には昆布しかない。その分か

再起を決心した私に、叔父は全面的に力を貸してくれた。

も鈍ってはいなかった。冴えた私の手が動くたびに、まるで魔法のように昆布のはなが削り出されて .父の工場の軒先を借りた私は、そこで仕事をはじめた。三年ぶりに昆布を削る私の腕は、

まだ昆布を削っている所はどこにもなかったので削った昆布はよく売れた。

返し、今の名古屋市中村区南祢宜町 ちわびる妻子を迎えに行ったのである。昭和二十一年二月のことであった。そして叔父の工場の軒を ため栄養失調でまたも長男を亡くしてしまった。それでも、働いて蓄えた若干の金をふところに、 ただ皮肉にも、私の帰ってくるのを待っていたかのように物資がさらに少なくなり、よい薬もない (現・名駅南二丁目八一八)の焼跡に堀立て小屋を建て、

共に移り住んだ。

死地をくぐり抜けてきた私に恐いものはなかったのである。 手に入れた。 差があった。 その頃の物資の流通は、 私は不退転の決意のまま、ヤミで巧妙に売りさばいた。原料昆布も良質なものをヤミで 組合理事長は私が統制違反に問われることを恐れ、 ヤミを通るほうが多かった。 表の価格と裏(ヤミ)の価格では儲けに莫大な 慎重にするよう注意してくれたが、

り工場長でやってくれないかということだった。 岡崎の昆布工場から、 職人を連れて親方で来てくれないかという話があった。

加工した昆布は ちらへ送ってくれと条件を出した。私の店で加工しようと考えたのである。 ってもらっては加工して送り返していた。 私 は岡崎の方まで行って仕事をする気はなかったから、 それが無くても送れたけれども 当時、原料昆布は移動証明がないと絶対に動かせなかった。 それなら移動 証明をつけた原料の昆布をこ そう交渉し、

はなかったのではないかと思うこともときどきである。 ま振りかえってみれば、 あのとき岡崎のほうへ工場長で行っていたら、 おそらく今日の「石昆」

苦難時代

私の生涯にとって最も大きな痛手を蒙ったのは戦争中、 米軍機の空襲で今までやっと苦労して築き

あげた一切合財をあっさり焼かれてしまったときだった。

度や一度ではなかった。

そのために一時は店を閉めて職を変えようか、それとも禁を破って職人になろうかと思ったことも

布原料の入手難、 どうにか叔父の支援で、その店の軒先を借り商売を始めてみたものの、激しい戦後のインフレ、昆 回転資金の不足などで本当に苦しい時代だった。

そういう一 進一退の状態が昭和三十年頃までつづいた。

それほど傍目にも内実も苦しい時が何年かつづいたのである。

いまは銀行へ頭を下げっ放し。それでも手形はおちない

かっては銀行へ金を貸すほどだったのに、

石川の店はいつ潰れるか、いつ潰れるかと思っていた者が沢山いたにちがいない。

朝から夜遅くまで金の工面に走りまわるという実状だった。

もしれない。 激変する社会の波に揉まれる人々にとり、 ただ、 昆布と名がついておれば何んでもよい。昆布の形をしていて安く手に入れば味な 落ち着いて昆布の味など賞味するゆとりはなかったの

どどうでもよいのだ。それが、当時の大衆心理ではなかったろうか。

良 が起こることもあるのだ。 てまちがってはいないと思う。 ていなかったと思う。私が守ろうとした信念、うま味のある良い物を作ってお客様に喜んでもらう。 い物を作っていれば坐っていてもお客様は必ず買いに来てくれる。この考えは商人道徳として決 私のように頑なに量よりも質だけを守りつづけようとする商法はこういった社会の激動期には向 ながい目で見れば必ずそうなる。 しかし、 一時的には、 ちがった現象

ほうも、そうまで手数をかけて売ろうとはしない。よく売れて利益のあがる品物のほうに重点をおく。 その当時は今日の生活、 っぱく説明してもなかなか分かってくれない。分かってくれても、それは極く少数の人だ。小売店の その一 そんな私の不況を救ってくれたのは昆布の原材料の値上がりであった。 こうした世情の中で、 明日はどうなるものか。おそらくそういった考えが人の心を支配していたと思う。 時的現象が、この時代であったように思う。大きな要因は社会の不安定ということ。 これは良い物だから価格も高いのだ、 いまの制度が何年もつづいていくと考えていた人は一人もいなかったのでは 品物の質がちがうのだと、いくら

が苦しくなった原因の一つに、こういったところもあった。 を大量に仕入れた。おそらく三、四年分はあったろう。その支払いも大変だった。店の金の遣 その以前 一時昆布原材料の不足で非常に苦しんだことのある私は、四方八方手を尽くて昆布

原材料は大量に仕入れたものの、先に述べたような社会的な背景がわざわいして、つくる製品は思

庫 「に積んでいるようなものである。喜ぶのは銀行だけである。 からの借入金もある。 そうなると莫大な昆布原料の在庫はすべて寝せ金になる。買入資金は全部が自己資金ではない。 借入金にには利息が付く。なんのことはない。 利息を支払うために昆布を倉

ところが、人生どこで転機が訪れて来るかわからない。

for が原因かよくつかめなかったが「あれよ、あれよ」という間に、この原料昆布が大幅に値上がり

したのである。

して、 .年分という在庫を抱え、その処置に苦慮していた私は必要なだけ残してパッと売りに出した。そ 当時の金で五十万円くらいの儲けを手中にしたのである。

昨日の泣き顔は笑顔に変わった。

0 顔を見ても善人に見える。笑うつもりでもないのに、 日まで金の工面に走りまわり、いつも打ち沈んでいた私の心には急に大きなゆとりができた。 つい笑顔になる。

当 一時の五・ 十万円といえばかなりの大金である。私はその金ですぐに借金をきれいに返し、 店の三輪

É 事を四輪自動車に買い換えた。

0 て派手に乗り回しはじめたのだから目をパチクリしたのもむりはない。 時 期だけを見守っていた。 1 たのは同業者たちである。石川の店はいつ潰れるか、もう潰れるということを前提にして、 それがあろうことか、 三輪車を二十万円くらいもする乗用四輪車に換え

は、 あとから思うに、あの五十万円というのは一種の投機利益だったと思う。あのころの日常の商売で いくら好況だったと仮定しても一時に五十万円という儲けをあげるのは難しかったと思う。

も商売上の必要からだったし、己むなく倉庫へ寝かすことになったのも私の本意ではなかった。 しかし、あれは投機だといっても私が意識的にやったことではない。昆布原料を大量に仕入れたの

その原因は社会情勢の激動である。

ろ寝かすことで店として大きな打撃をうけていた。

ないとさえ言われる。まさにそのとおりだと思う。 投機というのは、 とかく激動期にこそ大きな利益をあげ得る。安定期には投機というものの旨味は

転じて福となったのである。 私は店の危機を招いた社会情勢の激動によって、皮肉にも救われる結果になったのである。

私の過去には、これに似たようなことが何度かある。

北支那での南方行きのときの発病入院。このときも上等兵昇進を棒にふったと嘆いたが結果的には

前線に送られずこれで命拾いをした。

できたのだ。 つけるほど軽症でもない。病気はしても、その微妙な軽重の間にあったからこそ、真っ先に帰ることが 終戦後の復員がそうだった。入院してはいたが重病人ではなかったし、それかといってすぐ勤務に

私は、そこに人智では計りしれない、神仏の加護を感じる。



昭和28年10月百貨店



昭和28年12月百貨店



昭和29年 家族と共に



昭和30年 ルノー



昭和33年



昭和34年

さらにいえば、伊勢湾台風のときもそうだった。

この台風が東海地方を襲ったのは昭和三十四年九月二十五日から二十六日にかけてである。

二十五日の午前六時に台風の接近を報じ「暴風」

「波浪」の諸警報をだして市民

に厳重な警戒を呼びかけていた。

名古屋気象台では

台風の動きはひんぱんに報じられた。

だんだん本土へ接近するにしたがい、どうも東海地方へ上陸する可能性がつよくなった。

しかし、私は大して気にはかけなかった。

気象台の予報はあくまで予報。従来でもコースの間違いはあったし、つよい、つよい、と予報され

た台風が、上陸してみると季節風並みのよわいものであったりする。

そういうことで、 気象台で呼びかけているほどの危機感は感じなかった。しかし一応の対策はして

おくことにした。

台にあげたり、 店の者を動員して倉庫に使っていた二階の昆布に筵で覆いをかけたり、土間の昆布をトラックの荷 水の浸入を防ぐため土を盛ったり、雨戸に板を打ちつけて補強したり、 屋根瓦を点検

昆布にとって水は大の禁物。一度この雨水に浸った昆布は、使えないのである。

したりした。

その時、二階には大量の昆布を仕入れて置いてあったのである。

因みに、 この台風は私の予想をはるかに上回った強力なものであった。二十六日午後六時すぎ、 紀



昭和34年 伊勢湾台風後

伊半島 の潮岬付近に上陸した台風は、中心気圧が九二九・七ミリバール、最大風速四八・五米、 台風

0) 幅六〇〇キロメートルという強大なものであった。

この台風は名古屋西方を通って富山市方面へ抜けたのであるが、伊勢湾の沿岸地方にとって最大の

不幸だったことは、 八メートル余りの高潮を湾深く呼びこんだことであった。

岐阜三県で、死者四三四一名、行方不明七五三名、

被災世帯

三四万

二三七世帯、 被災者総数は一五四万九七九四人という甚大なものであった。

この台風による被害は、

三重、

二十五日、 台風が近付き時間の経過とともに次第に風雨が強くなってきた。

道路上をバケツや木片、 樹木の枝などが派手な音を立てながら吹っとんでいく。 電線は上空でひっ

きりなしにヒューヒューと唸り声をあげている。

家の 雨戸などは しっかり補強してあるのに、 いまにも吹き飛ばされそうに、ガタガタ心配な音を立

てつづけている。

くつづい

てい

前はわりと排水がよく、それほどの湛水はないが、川の流れのように、深さを持った流れが絶えまな 雨足は一段と激しくなり排水のよくない路上は、またたく間に一面の湖のようになった。私の店の

ように脹れあがる。 ふと見ると、 向か 何度もその動作を繰り返しているうちに少しずり落ちてきた。 いの昆布が積んである一階家の屋根瓦が、突風が吹き過ぎるたびに、

するとその隙間へ、 横なぐりの雨の束がどっと打ちつけだした。濁った雨水が雨樋から溢れだし、

烈風に容赦なく吹きとばされている。

ますます烈しくなった暴風と雨足。

あとで知ったことだが、この時刻、 海沿いの地方では、打ちよせる高波に家も、人も、

動物も、

るで玩具のように翻弄され、その犠牲になりつつあったのである。 そのうち屋根瓦の一枚がまるで魔法のように空中を飛んで地上に叩きつけられた。それがきっかけ

で、いままで必死に屋根の一角へ縋りついていた瓦は、次々に吹きとばされ、地上へ叩きつけられ粉

々に飛散した。

(これはえらいことになった----)

こういったときは、不思議によくないことばかり思い出すものである。私は丁稚から、 妻や店の者たちへの手前顔色には出せなかったが、私は内心で気が気ではなかった。

築きあげた財産と信用を一挙に失ってしまった、あの空襲の焼跡が目先にちらついて仕方がなかった。

営々として

(また、やられてしまうのか)

ばされて篠つく雨に満身創痍の姿をさらしている向かいの二階へ目をやった。

私は台風襲来にそなえ、トラックの上へ避難させておいた昆布の山と、屋根瓦がつぎつぎに吹きと

あの一階には数百万円の昆布が積んである。雨水にやられたらお終まいだ)

からも生きつづけようとする、昆布へ賭けた積年の夢は一瞬にして崩れ去ってしまうのである。 商品としての価値どころか、すぐに腐ってしまう。 私が生涯の仕事として生きてきた、 いや、これ

ドタッ!ドタッ!、突然、凝視しつづけていた二階の方で激しい物音が起こった。

外はすでに漆黒の闇である。外だけでない。家の中もだ。電灯はもうとっくに消えている。私は闇

(あの音は、 きっと雨水の音だ!。屋根瓦が吹きとんで雨水が漏りだしたにちがいない) の中へ凝然と立ち竦んだ。

とうとう来るべきものが来た。

その音は丁度、滝壺へ落ち込んでくる水塊の音に似ている。

万事休す! 一布へ賭けたわが夢は、またもや四十八才にして潰え去るのか。私の胸中は深い絶望感に、

ふかい闇に吸い込まれていくようであった。

横殴りに激しく降る雨の闇へ、すぐにでも駆けだしたい衝動に、

私はじっと堪えた。

いまさら一階の昆布を見に行ったところでどうなる。この風、この雨、 この闇だ。どうすること

もできないではないか)

内なるもう一人の私が、挫折感に意気消沈している私を、無慈悲にも叱りつける。 すぐ傍の闇に同じ思いであろうか、立ちつくしている妻の気配がうかがわれる……。

台風一過とはまさにこのことである。

翌日は風も収まり、雲も切れた。

私は夜が明けるのを待って向かいの二階家へ走った。妻もあとを追ってくる。

やっと土を見せた地上には木の枝や、板切れ、瓦の破片などが所狭しと散乱している。が、 私の心

は昆布のことでいっぱいだ。

足早に急ぐ私に「足元に気をつけて」と妻が声をかけてくれる。

階下まで急いだ私は階段の下まで来て急に足をとめた。階段を登る気がしないのだ。

「どうしたの?……」

後に来た妻が不審そうに、階段下に停む私に言う。私は(昆布を見たくない)と、思ったのである。

見ずに済むわけないのに、そう思ったのである。

可文、っようご、「見こ庁」)が作べてす」

何故いやなのだ……見に行くのが怖いのか」 そう言って私はハッとした。無意識に口をついてでた私の本心に一瞬狼狽した。

「・・・・俺が見てくる」

私は濡れた階段を登りはじめた。

やっぱり私も昆布を見るのが怖かったのだ。おそらく昨夜の雨で濡れていることはほぼ間違 いある

まい。あの雨、あの音である。助かっているほうが不思議だといえよう。

ある。 一夜にして数百万円の損害だ。この損害は私の昆布への夢の終焉を告げる。私も、もう四十八才で

階段をのぼりつめた私は、濡れた床板に用心しながら昆布の山へ近付いた。

『奇蹟』という語が現在にある以上、かってこのような事があったからにちがいない。

覆いの筵を取り除かれた昆布は、幸福の女神のように私にほほえみかけてくれている。 いまその 『奇蹟』を目の前に見た。いや見ているのだ。 これが 『奇蹟』でなくて何だろう。

私は救われた。なんと、 雨は両側に積んだ昆布の山と山との間に音立てて屋根からこぼれ落ちてい

たのだ。

線を注ぎつづけていた。濡れているはずの昆布が、ちっとも濡れていない。 私の昆布へ賭けた夢は、これからも生きつづけることができる。私は翳む目でじっと昆布の肌 に視

やっぱりこれは伏見のお稲荷さんが私を守って下さったのだろうか。それとも、 ご先祖がついて下

私と伏見稲荷さんとは不思議な因縁で結ばれているように思えて仕方がない。

よいのか直ぐ車をとばして見に行った。村社が道路をへだてて高いのでこの高さまで埋立をすればよ いかを印をつけて帰り後日その高さまで土をもり上げて工場を作る事にした。 又、すでにその時買ってあった工場の予定地、田にはどれだけ水があるのか埋立をどこまですれば

あるお社が伏見稲荷神社で、元官幣大社という格のたかい神社である。この神社が全国に散在 京 の東山連峰の南端に深草山というのがある。 その山 の北に稲荷山 がある。この稲 荷 Ш してい

お

荷さんといえば全国各地にお社がありよく知られ

ている。

3 お稲荷さんの総本山なのである。

この伏見稲荷神社の祭神は倉稲魂神(うかのみたまのかみ)猿田彦命・大宮女命 (おおみやのめ

の諸神である。

この神社は、 元明天皇の和銅四年、 秦公伊呂具(はたのきみいろく)が鎮守神としてこの地 に建て

たと言われている。

現在は広く産業の守護神とし、人々の信仰があつい。特に商売繁昌の神として、 その筋の人から深

く崇められている。

てひろく人口に膾炙 また、二月の初午の日の稲荷の祭。 い鳥居と白い狐 している。 (お稲荷さんのお使わしめと言われる)、それに油揚はお稲荷さんの代名詞とし

京都伏見稲荷の四月の第二の午の日の神幸祭、

及び五月初

卯 H

の還幸祭。四月九日の例祭は庶民の間にもよく知られている。

派なもので、 私の父も商売人であった。それで、やはりお稲荷さんを家へお祀りしていた。 私もよくお参りをしていた。このお稲荷さんは戦災で焼けてしまった。 その 私が復員して帰 お社は かなり立

元どおりお祀りしなければと心にかけていながら、 ご存知のような戦後の混乱期で一日延ば

6 われだったのかとも思うのであるが。 この頃 商売のほうも低迷をつづけていた。あとで考えてみれば、 これもお稲荷さんのご不満のあ

私が盲腸炎の発見が遅れて腹膜炎を併発し、その手術のため入院したのは、昭和三十一年末の十二

月二十五日であった。

それから約一ヶ月間病院生活を送って、三十二年の一月二十日過ぎ退院した。

この腹膜炎になった経緯がまた変だった。

入院する一年くらいまえから、ときどきお腹が痛んでいた。元来病気になど負けん気の私だったか

ら、そんなたまの腹痛なんか気にもかけなかった。

ったのが、三ヶ月、一ヶ月、一週間というふうに痛みだしたのである。 ところが、このお腹の痛みが次第に多くなり、その間隔もちかくなって来た。はじめ半年くらいだ

っていたのだが、はっきりした原因をつきとめることが出来なかったのである。 さすがの私も気味悪くなり、病院で精密検査を受けた。尤もこれまでもあちこちの医師で診てもら

精密検査の結果「これは大変だ。すぐ手術しないと命にかかわる」と、言うのである。

私だっていま死にたくはない。まだまだやり残していることが沢山ある。

病気の様子を訊いてみると、盲腸炎の発見が遅れたためにそこが破れて、膿が腹腔内へ溜り腹膜炎

をおこしているというのだ。

立ったが、もうあとの祭りである。 それを聞いて私はおどろいた。そして、これまで私を診てくれた医師たちのヤブぶりに無性に腹が

私は早速高岳のほうの病院へ入院し手術することになった。

矢 師の話では、 お腹をあけてみないと分からないが、ひょっとすると腸が癒着しているかもしれな

い。そうなると手術は大変難しくなると言うのである。

私はそんなことは知らないから、えらく沢山集ってくれたな。やっぱり俺も父に似て人望があるの 医師の指示で親類の人達が呼び集められ、それとなく私との生き別れを済ませた。

そういうことで、この手術というのは大変危険な手術だったのである。

だなと思ったりしていた。

そして、手術室へ運ばれた。

その大手術にもかかわらず、 今日私が命をながらえているのは、これ偏えにお稲荷さんのおかげで

あると私は思っている。

どうにか手術は済んだ。

それから二、 四日経った夜である。

夜中、物凄く暑くて寝苦しい。そのうちにウトウトしたと思ったら夢を見た。

った。私は伏見稲荷へお参りしようと、 えて来た。あっ、あのお稲荷さんだ!。それは、私が知っているお山にある伏見稲荷の鳥居の列であ らない。まわりの風景はぼんやりしていてさだかではないのに、目のまえにつづいている道だけはど うしたことかはっきりと目に映っている。はて、どこへ行く道だろう?。やがて行手に赤い鳥居が見 -----私は手術後の不自由な身体で一所懸命歩いてどこかへ行っている。周囲には人の姿は全く見当 病後の身体を運んでいるのだ。これは、 てっきりお稲荷さん

のことがよぎっていった。申し訳ない。私は赤鳥居をくぐりながらその気持で胸がいっぱいだった。社 が呼んで下さったにちがいない。有難いことだ。私の胸中をふっと戦災で焼けてしまったお稲荷さん

前に額付いた私の頭上を一陣の風がサーッと吹き抜けたようであった……。

はっとして目をあけた私のまえには、静寂な病室のたたずまいが広がっていた。

(ああ、今のは夢だったのか)

そう思って寝返った私の全身は脂汗でびっしょり、水に潜ったように濡れていたのである。

一日延ばしにしてきた我が家のお稲荷さんの再建のこと

であった。それは申し訳ないの一語に尽きる悔恨である。

夢でなく、

目覚めてなお残っていたのは、

私は家内を呼びおこし、いま見た夢のことを話し、身体の脂汗を拭ってもらった。

その日から、 不思議なことに今までいやいや口へ運んでいた食事が、うまくてうまくて仕方がない。

いくら食べても欲しくなるのである。

この食欲がでてからは、医師がおどろくほどの速さで身体が回復しはじめた。

早速家のお稲荷さんを再建することと、京都の伏見稲荷へお礼参りすることを誓ったのである。 (これはきっと伏見のお稲荷さんのご加護にちがいない)、 私と家内はそう話 しながら退院

月下旬、私にとっては大変ながかった病院生活を終え、家へ戻った。

は必死でその仕事を片付けることに専念した。日が経つのがまことにはやい。 約一ヶ月間 店を留守にしていたので仕事が山のように溜っていた。病後の身体を労りながら、

家のお稲荷さんは退院後、早速再建したものの、伏見稲荷へのお礼参りは多忙のためなかなか実現

ところが三月十六日、急用ができてどうしても大阪へ行かなくてはならない。往復切符は先に買っ

ておいた。そして僅かな小遺いを懐中にして慌しく大阪へ発った。

なった。そしてふらふらと京都駅のプラットホームへ降り立った。 が降り出しているではないか。その雪を見て旅情をそそられたわけでもないのに、ふと降りてみたく 大阪での用事を済ませ、京都駅まで戻ったところで窓の外を見ると、どうしたことか季節外れ

京都の友達を思い出し、急に懐しくなりその友達を訪ねることにした。 してしまった。あとは夜行しかない。どうしようかと考えているうちに、ふとながらく会っていない 部の甍に舞う雪の風情はまた格別のおもむきがある。その風景に見とれているうちに列車は発車

った。彼は昔から酒が強いので飲みだすと、なかなか止めないのである。 久し振りに会った友達と話は尽きない。とうとうその夜は遅くまで飲んで、そこへ泊まることにな

るままに二本、三本と銚子が重なる。十数本のところではっと気が付き、やっとストップする。これ なら……」ということでまた飲みはじめた。彼ほどではないが、酒が絶対嫌いでない私。すすめられ 翌朝目覚めて朝食。すると彼はまた銚子をさげてくる。「朝から酒は……」と渋る私に「一本だけ

彼はいい気持で集金へでかけた。私は奥さんのご好意で湧かしていただいたお風呂へ入った。酒で

だからいけないのだと反省する。

さんを思いだした。(そうだ。伏見稲荷へお礼参りをして帰ろう) ようかと思った。名古屋へは夕方までに帰りつけばよい。あれこれ考えているうち、 ほてる身体を湯につけ、思いきり手足を伸ばす。ああ、いい気持だなと思いながら、 ふっと伏見稲荷 これからどうし

そう思いついた私の心は弾んだ。

友達の家を辞して伏見稲荷へ向かった。懐中には三千円あるだけだ。こんなことならもっと持って

くればよかった。そう思ったけれど今更どうすることもできない。

私はお稲荷さんの社前にふかぶかと頭を下げ、病気回復のお礼と度重なる不都合のお詫びとをなが いやいや、人は金より心だ。きっとお稲荷さんも分かって下さるだろう。

そして私は懐中へ残っていた三千円でお稲荷さんの 『御霊』をお受けした。 ながと申しあげた。

みずみに満ち満ちてきたようである。私はしっかりとこの『御霊』を抱きしめて家へ戻ってきた。

その『御霊』をお受けした瞬間、私の体内を不思議な霊感がはしりぬけた。充実した気力が体のす

現在 お祀りしてある我が家のお稲荷さんの 『御霊』がそれである。

たのだと思う。 私が大阪からの帰途 偶然伏見稲荷へお礼参りできたのも、これはお稲荷さんが私をお呼びになっ

ねる。 京都で私の足を止めさせるような季節はずれの雪が降る。それにつられて列車を降りる。 奥さんが風呂を湧かして下さる。そこで身を浄める。そして伏見のお稲荷さんへ。持っていた 友達を訪

三千円で『御霊』をお受けする。

から終りまで、事前に計画されたようにキチンとつながっているのである。これは、どう思ってもお この一連の出来事は全くの行き当りばったりでバラバラのようなのだが、よく考えてみると、 始め

稲荷さんのお呼びであったとしか考えようがない。いまでも私はそう信じている。 さんのまえへ額く。そして、目を閉じ願いを通ずると必ず何かの啓示を与えて下さるのである。 それ以来、 **** 伏見のお稲荷さんへのお参りは欠かしたことがない。何か迷うことがあると必ずお稲荷伏見のお稲荷さんへのお参りは欠かしたことがない。何か迷うことがあると必ずお稲荷

私の家のお稲荷さんは伏見稲荷の分身である。私の今日あるのは、このお稲荷さんのご加護による

ところが大きいと思っている。

を三月十八日に盛大にお祀りさせてもらっている。 ろが偶然というべきか、その日は私の誕生日であった。以後、その日を卜して一年に一度、稲荷大祭 京都より『御霊』を受けて帰り、禰宜を迎えて鎮魂式を挙げたのが翌日の三月十八日である。

113



昭和31年12月



昭和37年



昭和40年



昭和40年



昭和44年



昭和44年 日本国有鉄道総裁賞

私の会社は現在「株式会社 石昆」となっている。

販売網も東京都及び関東一円、 静岡、岐阜、三重、 愛知・新潟各県に及んでいる。その詳細は末尾

にある「石昆・会社沿革」をご覧いただきたい。

私が現在の販売網をつくりあげるまではいろいろの苦労を重ねて来た。その一つ二つをご紹介して

「良い物

うまい昆布をつくってお客様に喜んでいただく」ことであった。そして、その信念で商売をすればき かった。今日の っとお客様は買って下さる、必ず店は繁昌するということであった。この私の信念は間違ってはいな 先に何度も記したように、五十年間一貫して私の目ざして来た昆布商人としての信念は 「株式会社

みたいと思う。

ているものと信じている。 私のところへ或る百貨店から昆布納入の話があったのは、終戦後間もなくの頃であった。

石昆」の存在と歴史は五十年にわたるこの信念の実践の上にこそ成立っ

30 その頃の市場というのは、 もちろんヤミ価格は公認されたものではないし、物資のヤミ流通そのものが違法なのである。だ どんな商品にも「表」と「裏」があった。 つまり公と「ヤミ価

か ら理 屈 上はヤミは存在しないが、 実体としては戦後日本の物資流通に重要な地位を占めていたので

あ

商人として生存するため、 でいかなければならなかったであろう。 もしその恩恵に浴さなかったとしたら、 つことは絶対に有利であると思った。 おそらく日本人全部がといってもよいほど、このヤミ物資の恩恵を受けてきたはずである。 入する価格はもちろん②価格である。私は今後の販路を考えた場合、 商売が成立つためには、 しかし、 あの衰しむべき事件"ヤミ米拒否"の法の番人のように死ん 私は当時の物資のヤミ流通を是認するわけでは決 ②価格で納品するとなると一寸考える。 それもまた己むを得なかったと言いたいのである。 百貨店と取引きを持 してない

なる。 納 渡れば、 あ のである。 によっては停止を食って商売がやれなくなる危険はあったが、儲けは比較にならないほど大きかった 品を断られたらおしまいである。確かに百貨店へ商品を納めるということは 3 用という点では役立つ。しかし、 倍の小売 つまりその無形のものが顧客、 それだけ 加工店は十九円で出していた。この昆布をヤミルートへのせると、 つまり遠回りして安全な橋を渡るか、近道をして危険な橋を渡るかである。早く向う岸 昆布は百匁二十五円の②価格で売られていた。この百匁二十五円のものは中卸 価格である。 沢山の果実が手に入る。 違法取引きを摘発されれば、 売り上げの増加と結び付いて、 これはあくまで無形のもの。 正直に②で商品を納入し、 もちろん罰金、 その効用が現れ はじめて店の利益 いくらも利益をあ 商品没 百匁五十円で売れるので 商品の質の保 収 るのは 割当 につながるの リザ か 削 ないうちに なり 减 価 場合

である。そんなものは社会の激変期、インフレの経済下では何の役にも立たない。つまり、長期の見

通しよりも短期の見通しのほうが大切なのである。

私は百貨店からの誘いを断った。これには同業者も、 商工会の連中も一様に目をまるくした。

「百貨店への納品を断ったというのは本当か?」

「そうまでしなくても・・・・」

「折角の機会を逃して惜しくはないのか」

言う人によって考えはまちまちであったが、共通して言えるのは、

「良い話を蹴った」ということであった。私は弁解がましくその人達に私の考えを説明はしなかっ

たし、また説明する必要もない。

百貨店との話はそのまま立ち消えになるかと思っていたところ、また課長が私の店へやって来た。

そして

?」と言う。 「石川さん。やっぱり貴方のところの昆布でないといけない。是非品物を入れてもらいたいのだが

られた〉そんな噂を流布されては、課長個人の面子もあろうが百貨店としても面目丸潰れである。 "一介の商人に袖にされた"となると百貨店の暖簾に傷が付く。 私は思った。おそらく課長としても面子があるのだろう。へ百貨店は石川へ昆布を頼みに行って断わ

あれから私もこのことについていろいろ考え、或る一策を立てていた。そのまま立ち消えになれば

それでよし。再度話がでれば、この策でと考えていたのである。そこで、

なまずい物と同じように並べないでいただきたい」と返事をした。 店さんがヤミ商品を売るわけにはいかないでしょうし、私も犠牲を払います。その代り、 ここは私の方が一歩譲るとして、納品の条件は、②の配給原料だけにしてほしいこと。 課長さん、私もできれば取引きしたい。しかし前回も申し上げたように、② 価格ということにな やっぱり二の足を踏む。しかし、一度ならず二度までもお誘いをうけて私も身にあまる光栄。 もちろん百貨 他店の安価

私の提案に、課長はしばらく思案していたが、

それだけ品物に自信があるのです。それが、あやしげな品物と一緒に並べられたのでは、オーお店の 評判も悪くなるし、私の店も困ります。そういったことでお願いしているわけですが……」 て『さすが百貨店で売っている物は良い』と言われるようにしたいと思っています。 まいで名が通っています。また、それが私の店の信条でもあるのです。私は百貨店へ良い品物を入れ 売って悪どい儲けをしようというのではありません。私の店の品物は東海どこへ行っても、良い、 をお願いするわけでして。石川さんの店の品物だけを入れるというお約束はどうも……」 「課長さん 「百貨店は良いものを安く、お客様へ提供するのが基本方針。そのためには納入業者に自由な競争 私の店の品物だけにして下さいとお願いしているのは、 売場を独占して悪い品物を高 うちの店には、

課長は私の話の途中から頷きながら聞いていた。そして、

昆布を入れることになった。

しいなあ、と思って行ってみると、売り場へ他所の店の品が並べてある。早速、 それからしばらくは平穏に推移した。ところが最近、どうも百貨店での売り上げが下降気味。 課長へ「約束が違う おか

と申し入れた。

すると、それは課長へ相談もせずに主任が勝手に入れたものだという。主任へ問い質すと「実は貴

店の品は高いもんで……」との返事。私はその他店の品物を見ながら言った。 「この品物はまがい物ですよ。嘘と思われるならここでダシを出して見て下さい。これと同じ品物

なら、私だったら半値で納めます。だが私の店では、こんなまがい物は売らない。だから当然高くな

る。こんな物を売れば店にキズがつきます。お宅様にも-----」

の店の品物は引きあげさせてもらうほかはない。 「私は百貨店を見損った。天下の百貨店ともあろうものが、こんなことをされるなら、今日限り私

私は主任が独断でやったこととはいえ、課長の違約を腹に据えかねていた。

私の強硬な発言にあわてた課長が、

は止めて貴方の品物だけにしますから。そう怒らないで下さい」 「まあ、まあ。これは確かに私の方の手落ちです。言われることはご尤も。これからは、この品物

「私もできるなら、このままお宅で売らせていただきたい。だがこれから先、またこのようなこと

かう あると困る。 今後、 課長さんが変わられてもこの約束だけはキチンと守ってもらいたい。 それがで

きなければ私も考え直します」

「よく分かりました。今後一度と他所の品は入れませんから……」

傍で不服そうな主任を、課長がさかんに目で制していた。

だからといって、 自慢するわけではないが、私の強硬な申し出を一蹴できないほど私の店の昆布は高級品であり、 胡魔化し品は絶対にない。それだけに人気があったのである。

しばらくして 「他の百貨店」からも納入の話があり、 取引きがはじまった。 やはり良い物

うまい物というのは確実に人の口から口へと伝えられるものである。 そこの取引条件は、配給で来る昆布については②で入れる。ヤミ昆布原料についてはヤミ価格で入

岐阜に「M」という百貨店があった。そこの部長から一寸来てもらえないかとの電話を受けた。 は

て、 何用だろうと訝りながら訪れた。 n

という現実的なものであった。

していた問屋は 変だから内緒だという。つまり私に新しい問屋になってくれというのだ。その当時、 昆布ばかり。この儘では、ますますはびこる。この際、 長の話では 二軒あった。これらの問屋は全部断わるから、 「昆布を内緒で入れてくれ」というのだ。 何とか問屋を入れ換えたい。 訳を訊くと、いま入っているのはヤミ屋の と熱つぽい口調。 それならと私は承諾 皆に知れたら大 M百貨店に納品

昆布を納入することになったのである。

合っても要領を得ず、 ところが、二、三ヶ月経っても一向に三軒の問屋はやめる様子がない。 埒があかない。 「M百貨店」の部長にかけ

来てもらったのである。 入れつづけるなら私がやめさせてもらう〉と申し入れた。その安物を納入している主人を前にして、 同 へこんな物をいつまで入れるつもりか。私には断わるからと、はっきり仰有ったではないか。 そこで私は、その問屋のうちの一軒に乗り込んで行った。そして、その店へ「M百貨店」の部 |類にされては困る」と迫ったのである。これだけのことを言うには、ちょっと勇気がいったけれ 結局、 安物の在庫を私が全部買い取って、やっと一本化することが出来た。 部長は何事か、とすっ飛んで来た。私はお二人を前において部長を詰 安物を 問した。

あとで皆が 「お前、相手の問屋へ乗り込むとは……」と言って呆れていたが、その頃、 私はまだ四

十代。そのくらいの元気はあった。

東海道筋にあるS市の百貨店へ納入するときにも一波乱あった。

たものの、度胸を据えた。よし、 連れ込まれた。そして「お前は、どうして俺の縄張りを荒すのだ」と凄まれた。私は内心ヒヤリとし まではおそらく使いきれないだろう。私の読みと度胸は当った。 この顔役 きをさせてくれと頼んだ。ところが顔役が一緒に昼飯を食おうといって、 私は百貨店の課長と連れだって、すべてを取り仕切っているS市の或る顔役の所を直接訪れ、取引 も百貨店へ出入りできなくなる。 刺すなら刺せと。ここで俺を刺せば百貨店の名が出る。そうなれば 賭けは五分五分かもしれないけれど、 私は一人料理屋の奥座敷へ 脅しはかけても刃物

たので、青くなって探したという。怪我がなくて何よりだった、と私より課長の方が胸を撫でおろし 私は顔役と食事し、世間話をし、自分の食事代を払って課長の所へ戻った。課長は私が居なくなっ

てくれた。

こうして、いろいろの機会に私は積極的に自分の店の昆布の品位を維持しつつ販路の拡大につとめ

つづけた。その時分には、②は外れていたのである。

一方、当時の部長さんや課長さん達は、ほとんど故人になられた。ここに謹しんで、ご冥福を祈る

次第である。思い起こせば、私を引き立ててくださった懐かしい人達ばかりである。

124



昭和43年





昭和48年 北海道研修会



昭和49年5月起工式

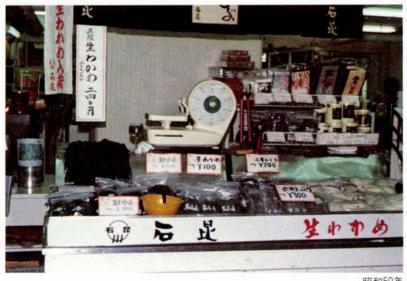


昭和49年11月10日落成披露





昭和50年



昭和50年



昭和57年5月ヨーロッパ旅行



昭和60年5月8回目の順拝



昭和59年6月工場増設



昭和59年8月才3、才4工場完成



衆議院議員 春日一幸氏 祝辞



昭和60年5月50周年記念式典



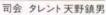
前島食品㈱ 社長 万才音頭



中央相互銀行常務取締役 加藤孝氏カンバイ

















50周年記念 式典



50周年記念 式典



50周年記念 分2部社員との祝賀会 社長あいさつ



50周年記念 オ2部社員との祝賀会



50周年を記念して、61年12月2日 新築名駅南店オープン



昭和61年12月2日 新築名駅南店オープン テープカット





名駅南店 新築









である。この信念は昆布屋を志してからこちら、一貫して変わることがない。 私の信念は何度も述べたように、良いものを作れば必ずお客さんが買いに来てくださるということ

本格的なものになって来つつある。では、養殖したものと天然のものとはどこがちがうのか。見かけ これを人工的にかけ合わせて養殖をする。こうした傾向は天然昆布の減少ということもあって次分に 近魚でも、 さかんに養殖ということをやっている。それは昆布にもある。 良い昆力 布 の種だ を採り、

は確かにちがわないように見える。

しかし味がちがっている。

まりコクがない。 砥めても変わりはない。しかし、 味であり、養殖で人工的につくった昆布は水にのばした砂糖の味と考えてよい。 この味 のちがいを説明すると、 要は、 このコクのちがいである。天然の海で採れ 同じ味では決してない。水にのばした方は、どこか物足りない。つ 例えば砂糖は生地を砥めても、 この砂糖を水にのばして、その水を る昆 布はコクのある生地の砂糖の

もだんだん改良されて近い将来、天然物と変わらなくなるのではないか。そうなる日が一日も早く来 客さんに本物の味を知ってもらうという私の商人としての永久の信念なのである。 だから本物を目ざしている私は、天然の昆布以外は絶対に使わない。これは良いものをつくり、 しかし一方、

ることを待ち望んでいるのは私ばかりでないと思う。

例として私の工場でやっている昆布の処理と、一般的にやられている昆布の処理とのちがいをお

私の工場では、天然の昆 布を炊くのに、およそ六時間 かけている。

話ししておこう。

「布は一度軟らかくなり、大きく脹らんでくる。さらに、それを煮て元の量になるくらいまで煮つめ 大きな釜に天然昆布を七キログラム入れる。それにたっぷり汁を入れ、グツグツ煮る。すると中の

3 この作業工程が大体六時間はかかる。 昆

えて 他所ではどうしているか。まず、同じ大きさの釜に二十キログラムの昆布を入れる。これに水を加 晩漬けておく。すると、やはり軟らかくなって大きく脹らむ。 翌朝、 その昆布に二時間

味 付をする。 これが一般の作業工程である。

この作業工程の差と、天然ものの昆布……。ここに私の店の商品の良さ、味の良さの秘密が隠され

たものは、昆布の芯に固さが残っている。嚙むと、餅のように歯にベタついて残る。 こうして出来上った昆布は食べて見れば、そのちがいが直ぐに分かる。二時間で味付けして仕上げ

茶漬けを食べると、実にあっさりしていて味がよい。つまりコクが出ている。 時

実に歯切れがよい。

コリッとしている。

この塩昆布でお

も七

間もかけて仕上げたものは、

分でいうのもおかしいが、昆布の味を知りつくしているはずの私でさえ、食べるたびに"うん、

うまい昆布だ〟と思う。それだけ自信がある。

品物をお届けしてお客様を満足させる。これが真のサービスであり、私の信念でもある。 お客さんの要望どおり、数だけ間に合わせて品物の信用を落とすより、数は少なくても信用のできる 対に許さない。 とかく注文が多くなると、 工場でつくった製品は必ず自分で試食してみる。そして、満足した味でないと出荷させない。 だから製品が間に合わないことだってあるし、造れなくてお断りすることだってある。 出荷を急ぐあまり粗製濫造となりやすいが、そういうことは私の店では絶

また、ほかのことは一切できない。それしか能力のない人間でもある。 私にとって良い昆布、うまい昆布をつくってお客様に喜んでいただくことこそが生涯の仕事であり、

はないかと危惧したことが何度かあった。 来た。それは大変嬉しいことなのだが、ふっと私一代でこの「石昆」という名物昆布屋も終わるので 言うまでもなく、私は昆布に一生を賭けて来た。 昆布を通じて、お客様にも随分喜んでいただいて

かし、現在は安心している。

ない事には実は結ばれないことである。 息子の光一が後を継いでくれるからだ。これは、 いくら親が希望しても本人がその気になってくれ

Ut が高校三年生の時だった。大学へ進学するか、昆布屋への丁稚の道を歩むか、その岐路に立ってい る」、そう言われたときは本当に万感胸に迫って声を出すことが出来なかったものだ。それは、光 光 一から「親父が昆布に一生を賭けた執念には頭が下がる。僕も親父の跡を継いで昆布に生 涯をか

たときでもあった。

は餞けの言葉を贈った。 後を継ぐと決心して、 息子は大阪の同業者のところへ修業に行った。彼が大阪へ出発するとき、 〈骨身を惜しまず働け。仕事に情熱を持て〉

光一は大阪で、修業一筋の生活をおくるため会社の寮へ入った。

私は不快な気持で息子の部屋に入った。 ぼえ、そこのドアを開けた。開けて、すこし驚いた。あちこち塵は落ちているし、 階だったので階段をのぼった。丁度、 が住んでいるその寮は、 あるとき所用で大阪に出向いた私は、用事が終わってその寮を訪れたことがある。 いたって殺風景であった。 階段を上りきった所に便所があった。 それに、 通路なども汚れている。 便所を見て急に尿意をお 便器も汚れている。 光一の 独身の男ば は かり

に神経を使っている。お客様が来られたとき、不潔感を与えない。不快感を感じさせない。こうした 私のところでは本社でも支店でも工場でも、会社のすべての建物や構内では清潔ということに非常 食品を扱う会社として最も大切な心構えであると思っている。

所へ入ってみて清掃が行きとどき、見るからに清潔感が感ずるようであれば他は見なくてもだいたい は私の持論だが、どこの会社や、 工場でも清潔の盲点となるのは便所であると思っている。便

えてまずまちがいない。 その会社や工場で造られる食品は、衛生面は言うに及ばず、すべての面で信用がおけるものだと考

見当がつく。

私

私は、息子にそのことを話して名古屋へ帰った。

それから何ヶ月かして、同業者の集まりが大阪であった。光一を修業に出している先の店の社長も 会議が終ったあと、その社長がつかつかと私の所へやって来て言った。

(= 「やあ、石川さん。お宅の息子さんは、ほんとうによく働いてくれる。全く骨惜しみしない。それ 実に細かい所にまでよく気が付く。あんなに間に合う青年には出合ったことがない。有難いと感

謝しているくらいです」 親馬鹿と思われるかもしれないが、自分の子を褒められて悪い気はしない。

「いやあ、 そう言ってもらうと恥ずかしい。それもこれも、社長がよく仕込んで下さったおかげで

ı

私は内心の嬉しさを隠して答えたつもりだが、頬のゆるむのを押えようがなかった。

その後、こうした話を大阪や京都の同業者仲間から何回か聞かされた。

と見違えるほど清潔感に溢れていた。便所がそうだから、廊下も部屋の中も言うところはない。因み がある」、そう言って私を真先きに連れていったのが便所である。入って見ると、これがあの便所 に修業を終えて名古屋へ帰った光一は、 ある期待をもって息子の入っている寮を訪ねた。玄関口まで出迎えた光一が「お父さん、見せた ることに大きな期待と安心感を覚えたのである。それからまた大阪を訪れる機会があったので、私は その度に私の嬉しさは隠しきれなかったが、それ以上に光一が確実に私の後継者として育ちつつあ いまでも毎朝早く出社して、ずっと便所掃除をつづけている。

便所の話ばかりで恐縮だが、こんなこともあった。

(この会社はどんな経営をしているのかな) と危んだ。そんな気持で眺めていたところ、 何の用件だったか覚えていないが、或る会社を訪れたことがある。ところが工場内が随分と汚れて 殊に便所へ行ってみると、ここしばらく掃除した気配が全く見えない。私はその状態を見て、 間もなく赤

字経営となり、とうとう潰れてしまった。

様に喜んでもらいたいという一貫した信念がある。いくら店の経営が苦しくなっても、 もちろん私の店にも不況時代はあった。 何度も言うようだが、私には味の良い昆布をつくってお客

える気持は全くない。不況時、 店のことを心配してくれる友人達は

利幅を考えて、少しは質を落とせよ」など、

いろいろ助言してくれたが私の信念にはすこしの揺

ぎもなかった。信念を曲げるくらいなら店が潰れてもよいとさえ私は思っていた。

り気ではなかったが、 そのころ、ある経営学畑の著名な先生が一度、私の店を診てやろうと言ってくれた。 折角そう好意をみせて下さるので「お願いします」と改めて店へ来てもらった。 私はあまり乗

「まだ貴殿の店は立ち上がる見込みがある」と言われる。一とおり店の中を見てまわると、その先生が判定された。

私はそんなに気にはしていなかったものの、 やはり無関心ではいられない。それで何故ですかと訊

いてみた。すると、

「便所がきれいだから……」との返事。つづいて「しかし、 お茶を出すとき、 欠けた茶碗で出すの

はよくない。あれは貧乏くさい。その貧乏くさい気持の持ち方が、商売の邪魔になる……」と。

私は気付かなかったが、お茶を出した茶碗が欠けていたらしい。

便所の話ばかりになったけれど、私の店は食べ物商売なのだから、便所であろうと何であろうとな この先生の助言は私の気分転換に大変役立ち、経営立て直しの一因にもなった。

なことを当然なまま、 めてもよいくらい、 もし今日の「石昆」が世間様から経営的にも成功だと見られているのなら、 いつも綺麗にしておかなければならないのは当然である。 励行してきた結果に過ぎないと思っている。

一事が万事、この当然

143

石昆・会社沿革

創 業 大正7年5月 先代藤之助 1/1 売業を始

昭 和2年6月 現会長京都浜庄商店にて昆布 加工技術を修得

昭 昭 和15年1月 和10年5月 名古屋市中村区牧野町宮裏にて名古屋で始めて 愛知県昆布卸 商業協 の専門 同組 合 加工工場を作る。

口 第二次大戦物価統制令の為、 期 間中、 北海道根室及び現在ソ連領 0 歯舞、 千島列島、 共同 国後島を視察昆布の移入に 加工場、 工場長となる。

当る一方志発島にて工場設立に当る。

第二次大戦北支に召集される。

終戦後北支より復員店舗工場戦災の為、

焼失

中 村区名駅南二丁目8-8に移転営業再開 布有限会社と法人組織に変更する。

和33年3月 伏見稲 荷御霊を勧 請 する。 昭

和26年6月

石川昆

昭 昭

和

18

年10

和20年12

月 月

昭

海部郡 汐昆布天禄を賀陽宮様 美和 町 1 工場 用 よりおほめの言葉と記念品を頂戴する。 地 取 得

月 美和 工場 建設、 本格的に採業を初 80 る

昭 昭 昭

年8

和 和

43 40 和 和

34年10月

34年5月

昭 昭

和43年12月 年11 月 汐昆 汐昆布やなぎばし、 布やなぎばし、 東京にて開かれ 名古屋観光土産品協会より推薦品 た日 本 商工会議所全国観光土産品 の指定を受け 市長賞を受賞する。 連盟主 催

全国推奨観光土産品審査会において味の金メタル日本国有鉄道総裁賞受賞

による

昭 和44年3月 汐昆布やなぎばし、 東京日本橋三越本店にて受賞式及び記念売出しを行う。

和45年2月 汐昆布やなぎばし、 第9回農業祭参加第19回全国水産加工たべもの展に於いて大阪府

昭

知事賞受賞

昭

昭 和48年5月 石川昆布有限会社より株式会社石昆に組織及び商号変更を行う。

和49年11月15 日 事業の発展にともない東区泉三丁目に本社ビル完成開 中村区名駅南二丁目8~8の本店店舗を名駅南店とし、 店する。

株MSセンター 中島コンサルタントの指導を受ける。

和51年8月

年 11

月

熊谷市

一桜町に関東営業所設立

年11 月 美 和工場 増築

昭 昭 昭

和 和53

54

昭和54年12月 あい昆布巻新発売

56年5月 テレビ、ラジオ、 CMにタレント「春やすこ・けいこ」と契約

昭 和58年3月 美和工場改装。

和59年6月

本社ビル改装。

昭

和

和59年9月 美 和工 一場増 築

昭 昭 昭

和60年4月

社員パーティー、 創 業 五十周年祝賀会を名古屋国際ホテルに二百名様招待して盛大に行なう。 永年勤続者の表彰を行なう。

146

昭和60年7月 取締役石川昌技(石川忍夫人)死去。

昭和60年8月 代表取締役会長 石川忍 代表取締役社長 石川光一

監査役 石川正子それぞれ就任。

資本金一五、四〇〇、〇〇〇円~三〇、八〇〇、〇〇〇円に増資。

名駅南店 新築開店。

海部郡美和町に第二工場用地取得。

昭和61年8月

昭和60年8月

昭 和 62 61 年 12 月

第二美和工場

佃煮加工工場新築。

あとがき

ておかねばならないこと、記憶にあるうちに印しておこうと筆をと 紀をはるかに過ぎていました。その間の思い出に残ること、とどめ った次第です。ご笑覧ください。 なお昭和六十年四月十九日、石昆創業五十周年の祝典を名古屋国 懸命に生きてきて、ふと気づいてみると昆布に賭けた年月が半世

光一に託しました。 お取引きの皆様など二百五十名様から家内共々に祝福をいただき、 際ホテルにおいて挙行した際は日頃お世話になっている百貨店様 ありがとうございました。この日を契機に社長を退き、あとを長男

が誕生して間もない昭和六十一年七月十八日、こんどは妻が足早に これで心おきなく悠々自適の老後をと思っていた矢先、孫の哲司

ます。 せん。今後、生きている限り世間様のお役に立ちたいと願っており ると私自身これから先、 たれ、再びこの憂き目にあうとはと悲胆に暮れましたが、考えてみ あの世へ旅立ちました。私は昭和二十四年十月に先の家内にも先立 何年の寿命をさずかっているかもわかりま

げます。 至らぬ小史にお目を通してくださいました皆様に心から感謝申し上 助言を賜わりましたことを厚くお礼申し上げます。また、この私の た飯塚伎先生、シマデザインの社長様ほか多勢の方々にご援助、ご この稿を閉じるに当り、中島弘先生をはじめ執筆ご指導くださっ 昭和六十一年十二月

石 Щ 忍

拝



汐風の詩

印刷・秀文社㈱製本・飯島製本㈱



